

地域研修報告書

2009



ASAZUMA Seminar I・II ITO Seminar I



UCHIDA Seminar I・II

NISHIMURA Seminar I・II

SATO Seminar I・II JO Seminar I・II・III

OKUDA Seminar II

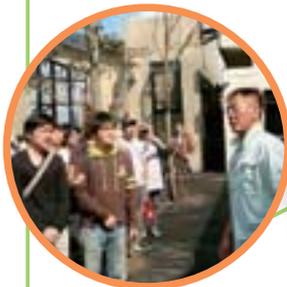
KASAI Seminar I・II

HIRANO Seminar I・II

KAWAMURA Seminar I・II

KITAKURA Seminar I・II

TAKAHARA Seminar I・II



KOSAKA Seminar I・II KODA Seminar I・II



YAMADA Seminar I・II

FURUBAYASHI Seminar I・II



MIZUNO Seminar I・II

MIZUNOYA Seminar I・II



CONTENTS

北海学園大学経済学部 ● 地域研修報告書2009 目次

1 ……『地域研修報告書』の発行にあたって 経済学部長 小林 真之

2 ……地域研修報告会

4~5 ……地域研修1年間の流れ・研修地一覧

6~29 ……地域研修ゼミ報告（2009年度 地域研修Ⅰ・Ⅱ 参加24ゼミ 計383名）

6 ……浅妻ゼミⅠ



帯広市・釧路市の乗合バス事業に関する実態調査
研修地／帯広市・釧路市

7 ……浅妻ゼミⅡ



現場で学ぶ交通まちづくり
研修地／堺市・加西市・三木市・京都市

8 ……伊藤ゼミⅠ



ニセコ山系観光に見られる国際化の動向
研修地／倶知安町

9 ……内田ゼミⅠ



芽室町上美生地区の地域住民組織と地域づくり
研修地／芽室町

10 ……内田ゼミⅡ



「十勝芽室コーン炒飯」とリーダーの主体形成
研修地／芽室町

11 ……奥田ゼミⅠ・Ⅱ



最北の町の地域づくり
研修地／稚内市

12 ……河西ゼミⅠ・Ⅱ、川村ゼミⅠ



財政再建下の夕張市民の暮らしの現状と政策課題
研修地／夕張市

14 ……川村ゼミⅡ



北海道における非正規労働をめぐる問題と政策課題
研修地／札幌市

15 ……北倉ゼミⅠ・Ⅱ



グリーンツーリズム・part 6
研修地／長沼町

16 ……小坂ゼミⅠ・Ⅱ



近代製鉄のルーツを探る
研修地／室蘭市・伊達市

17 ……小田ゼミⅠ・Ⅱ



地域づくりを多様な取り組みから学ぶ
研修地／美瑛町・旭川市

18 ……佐藤（信）ゼミⅠ



十勝の農業生産者と消費者組織の結びつきを調べる
研修地／帯広市・豊頃町・池田町・幕別町

19 ……徐ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ



中国進出の北海道企業と北海道の華人企業
研修地／札幌市

20 ……高原ゼミⅠ・Ⅱ



地域におけるネットワークと地域経済活性化
研修地／栗山町・江別市

21 ……西村ゼミⅠ・Ⅱ



都市と漁村の結合~新・函館市のまちづくりと課題
研修地／函館市

22 ……平野ゼミⅠ



フェアトレード(FT)活動の現状と課題
研修地／札幌市

23 ……平野ゼミⅡ



北海道における外国人研修制度の成果と課題
研修地／札幌市

24 ……古林ゼミⅠ



サケの増殖・漁獲・流通・加工を体験的に理解する
研修地／標津町

25 ……古林ゼミⅡ



競走馬の生産・流通・利用の理解
研修地／新ひだか町・浦河町・様似町

26 ……水野ゼミⅠ・Ⅱ



朝鮮人強制労働現場の見学
研修地／幌加内町

27 ……水野谷ゼミⅠ・Ⅱ



事業系食品廃棄物の現状と課題
研修地／札幌市・石狩市・恵庭市・森町・函館市

28 ……山田ゼミⅠ



帯広の地域メディアの実態とその戦略
研修地／帯広市

29 ……山田ゼミⅡ



関西の地域メディアの実態とその戦略
研修地／京都市・吹田市・神戸市



2009年度 『地域研修報告書』の発行にあたって

北海学園大学 経済学部長

小林 真之

「地域研修」が経済学部のカリキュラムの一環に位置づけられ、実施されてから今年で6年目をむかえます。当初は新しく設立された地域経済学科の独自科目として出発したが、その後は経済学科にも開講されることになり、経済学部と地域社会との関わりを深める特色ある事業に発展しています。そうした実績が認められ、事業団の「私立大学教育研究高度化推進特別補助事業」に採択されました。

経済学部では学生が4年間で経済学の知識を体系的に学べるようにカリキュラムを作成し、講義・ゼミナールを通じて彼らが今後立ち向かうことになる社会への認識を深めるように努力しています。そうしたカリキュラムのなかで「地域研修」は地域社会・経済の現状を具体的に知るにより学生の学習意欲を高めると同時に、地域で実際に活動している地方自治体、民間企業、NPOなどの諸団体と連携して地域社会がかかえる課題を解明し、具体的な提言を行うことにより社会貢献をおこなう特色ある科目として位置づけられています。

地域研修のテーマも年々多様化しており、その成果は12月に開催される「地域研修報告会」で学生により報告され、その概要が本報告書としてまとめられています。今後も地域研修をより一層充実させていきたいと願っています。地域研修に御協力いただきました地方自治体、各種団体の皆様には厚く御礼を申し上げます。

地域研修ガイダンス | 2009年4月11日 50番教室



地域研修報告会

2009年12月5日、12日

40番教室、50番教室、60番教室



2004年から始まったフィールドワーク型講義「地域研修」は今年で6年目を迎えました。ゼミ単位で実施される「地域研修」は、教員の指導の下、学生主体で研修テーマ・内容の決定、事前学習（対象地域の歴史・経済の下調べ、統計資料の調査、質問票の作成など）、そして現地での研修が行われ、その成果を履修者全員参加の「地域研修報告会」で発表します。報告会に向けてのまとめ作業を通じ、また、報告会で他のゼミの発表を聞き自らが学習した地域と比較する中で、問題意識をより明確化していくことが可能です。

本年度の「地域研修報告会」は12月5日、12日の2日間の日程で行われました。本年度の「地域研修」参加ゼミは24ゼミ、履修者数は383名を超えたために、報告会は3つの会場を使って、同時並行で実施することにしました。

参加ゼミは報告会に先立って、研修内容をまとめた資料（A4用紙2枚分）を提出する方式とし、報告会当日には各ゼミの研修内容が一覧できる「報告資料集」が全員に配布されました。この「報告資料集」に加えて、参加ゼミはプレゼンテーションソフト（パワーポイント）などを使って研修結果を大きなスクリーンに映し出しながら発表します。スクリーンには研修日程、研修テーマ、研修内容、さらには研修風景の写真などが提示されました。各ゼミわかりやすく伝えようとする工夫が見られ、過去に実施された報告会の経験が十分に継承されていることを実感しました。

各ゼミの発表後には、昨年引き続き質疑応答の時間を設けました。鋭い質問に対し、回答に苦勞するゼミがある一方で、適切な回答をするゼミもありました。この質疑応答の時間を設けたことにより、発表するゼミ生は、大勢の前で発表する難しさやその意義を実感することができたと考えています。

「地域研修報告会」の参加ゼミ全体を見回すと、実に多様な研修地域・内容が取り上げられています。訪問先は道内だけでなく、道外の諸都市にも広がっています。複数のゼミが合同で研修を行ったり、地域実態調査を長期間にわたって実施したり、地域の人々とのコラボレーション（協働）で調査研究を行うゼミも出てきたりするなど、「地域研修」はより学習効果の高いものへと変わってきました。このように充実した研修の成果を、地域研修に参加したゼミ生・教員の全体で共有できる学びの場＝「報告会」づくりの工夫が今後の課題です。報告時間や質疑応答の時間が十分取れていないこと、質疑応答をさらに活発化させる余地が残っていること、などの課題があります。報告会の形式改善には引き続き取り組んで行きたいと思えます。各ゼミの次年度でのますますの研鑽を期待しております。



（地域研修担当委員 小田清・浅妻裕・水野谷武志）





地域研修 1年間の流れ

地域研修は夏休みに行われる現地研修（フィールドワーク）が中心ですが、そのためには事前の学習、研修後にその成果をレポートにまとめる作業、報告会でのプレゼンテーションまで、これまでの教室での講義・理論の要素に加え、実践的な学びが必要とされる複合的な学習です。

4月 ● 地域研修ガイダンス

地域研修担当教員から当該年度の地域研修に関するガイダンスを受けます。

5月 （ 7月 ● 事前学習（研修テーマなどの決定）

ゼミ担当教員の指導のもと、ゼミ単位で研修対象地域の社会、経済状況などについて、関連自治体・団体などから提供された資料によって、研究対象地域の概要を勉強します。

8月 （ 9月 ● 地域研修実施

おおむね夏休み後半から10月初旬にかけて現地研修を行います。現地研修では関連自治体・団体・企業などからのヒアリングを行い、関連施設の見学や実地見聞、実態調査などを行って研修内容を深めます。

12月 ● 地域研修報告会

地域研修の成果に基づいて報告レポートを作成し、ゼミ単位で発表を行い研修成果をゼミ相互で確認しあいます。

3月 ● 地域研修報告書の作成

地域研修報告会の発表レポートをもとに、研修の成果を報告書としてまとめます。



地域研修履修者数



地域研修実施ゼミ数



研修地一覧



石狩支庁管内

- A 石狩市 水野谷ゼミⅡ
- B 江別市 高原ゼミⅡ
- C 恵庭市 水野谷ゼミⅡ

空知支庁管内

- D 幌加内町 水野ゼミⅡ
- E 夕張市 河西ゼミⅡ
川村ゼミⅠ
- F 栗山町 高原ゼミⅡ
- G 長沼町 北倉ゼミⅡ

宗谷支庁管内

- L 稚内市 奥田ゼミⅡ

上川支庁管内

- M 旭川市 小田ゼミⅡ
- N 美瑛町 小田ゼミⅡ

根室支庁管内

- O 標津町 古林ゼミⅠ

釧路支庁管内

- P 釧路市 浅妻ゼミⅠ

十勝支庁管内

- Q 芽室町 内田ゼミⅡ
- R 池田町 佐藤ゼミⅡ
- S 幕別町 佐藤ゼミⅡ
- T 帯広市 浅妻ゼミⅠ
佐藤ゼミⅡ
- U 豊頃町 佐藤ゼミⅡ

胆振支庁管内

- V 室蘭市 小田ゼミⅡ
- W 伊達市 小田ゼミⅡ

日高支庁管内

- X 新ひだか町 古林ゼミⅡ
- Y 浦河町 古林ゼミⅡ
- Z 様似町 古林ゼミⅡ

- H 札幌市 川村ゼミⅡ、
徐ゼミⅡⅢⅣ、平野ゼミⅠ、
平野ゼミⅡ、水野谷ゼミⅡ

後志支庁管内

- I 倶知安町 伊藤ゼミⅠ

渡島支庁管内

- J 森町 水野谷ゼミⅡ
- K 函館市 西村ゼミⅡ
水野谷ゼミⅡ

- 三木市 浅妻ゼミⅡ
- 加西市 浅妻ゼミⅡ
- 神戸市 山田ゼミⅡ
- 京都市 浅妻ゼミⅡ、山田ゼミⅡ
- 吹田市 山田ゼミⅡ
- 堺市 浅妻ゼミⅡ



浅妻 裕 ゼミ I

ASAZUMA Yutaka Seminar I
参加学生数 14人



浅妻 裕
経済学科
准教授



帯広市緑ヶ丘 公園にて

帯広市・釧路市の乗合バス事業に関する実態調査

研修目的

地方都市では自動車の普及や都市構造の変化によって、乗合バスの利用者が長期的に減少しサービス水準が悪化している。これは環境問題や高齢化問題を重視すれば、改善すべきと考えられる。そこで、乗合バスの実態に関する情報をいくつかの方法で把握し、活性化の方法について模索した。

● 研修地 一 帯広市・釧路市

研修期間・研修先

- 9月8日 帯広市内バス利用者アンケート調査、帯広市内バス利用のOD調査、帯広市役所ヒアリング、帯広市内泊
- 9月9日 帯広市内・釧路市内バス利用者アンケート調査、帯広市内・釧路市内バス利用のOD調査、釧路市役所ヒアリング、釧路市内泊
- 9月10日 釧路市内バス利用者アンケート調査
釧路市内バス利用のOD調査、釧路市内コテージに宿泊
- 9月11日 帰札

総括

研修の成果は以下の3点にまとめられる。

一点目はバス事業を支える制度についてである。一般的に地域公共交通は社会的インフラと位置づけることができ、国や地方自治体が路線維持のための補助制度を有している。仕組みが複雑であるが、帯広市や釧路市での行政担当者の説明により仕組みを理解することができた。補助額が自治体にとって負担となっているなどの課題も明らかになった。

二点目は、バス利用の実態把握である。帯広市・釧路市共通して、40～50歳代以上の利用者が多くみられた。20歳代、30歳代（特に男性）の利用者が少なく、マイカーでの移動が主であるようだ。また、通院や所用で利用頻度の高い利用者から、バスの便数の減少に対する不満が大きかったが、乗務員の対応については両都市ともかなり改善されていると評価する声が多かった。

三点目は、都市構造がバス利用に大きく影響していることである。調査は主に市街地を中心に実施したが、終日閑散としており、派生的需要であるバス利用の必要性が生まれにくいのではと感じた。事業者も郊外ショッピングセンタ（SC）—郊外SCを結ぶ路線を開設するなどの工夫を行っているが、バス事業全体の改善にはなかなか結びつかないようだ。



帯広市役所でのヒアリング



アンケート調査中

学生研修記



バスサービスに対する利用者の声

佐藤 かおり
地域経済学科2年
静内高校出身

今回、釧路・帯広両市のバス停で、利用者「路線バスの利用ニーズに関する調査」（アンケート）を実施し、いくつかの質問に答えられました。利用者からの直接の声を集約することによって、乗合バスに求められているものが分かった気がします。特にこの10年間でのバスのサービス水準について、本数が減った・不便になったなどといった声が多くみられたことが印象的でした。

各市役所でのヒアリング調査では、地域公共交通総合連携計画を中心に職員からお話を伺いました。バス利用の低迷・路線廃止・利用者減少といった現状に対する市の取り組みについて地域住民との意見交換や様々なイベント実施によってバス利用の増加をはかっていることがわかりました。

今回の研修は、アンケート調査と行政へのヒアリングから今後の公共交通の在り方・必要性を認識し考えるよい機会になったと思います。



いざアンケートへ!



終日頑張りました



釧路市役所でのヒアリング



釧路駅前バスターミナル

釧路の地域公共交通政策

林 敬之

地域経済学科2年
札幌新川高校出身

帯広・釧路市役所で行ったヒアリング調査では、地域公共交通の活性化に向けてどういった政策を行っているかがわかりました。帯広市では、モビリティ・マネジメントを実施しています。職員が小学校を訪問して、小学生にマイカー利用による環境負荷の問題、地域公共交通の賢い使い方を説明し、将来の利用につなげる取り組みです。他にも、回収した廃食用油を使って走るバスの試験運行を行うなど、環境に配慮した交通政策を行っています。釧路市では、毎月最終金曜日ノーマイカーデーを実施しています。単なる呼びかけではないところが重要です。これにあわせて、夜7時以降のバスを増便し、さらに市内の飲食店が「晩酌セット」（バス券がサービスされる）を扱って、「飲んだらバスで帰ろう」をアピールしています。今回の研修は地域公共交通に関する各地域の現状を知るよい機会となりました。

浅妻 裕 ゼミⅡ

ASAZUMA Yutaka Seminar II
参加学生数 15人



浅妻 裕
経済学科
准教授



北条町駅にて

現場で学ぶ交通まちづくり

研修目的

現在、都市の大気汚染問題、空洞化問題、高齢化問題などを背景として、公共交通の再編を通じたまちづくりが模索されている。関西ではこの取り組みが活発に行われているため、現地を訪問しヒアリング調査などを行った。

● 研修地 一堺市・加西市・三木市・京都市

研修期間・研修先

- 10月26日 堺市役所にて、LRT導入に関するヒアリング
堺市役所にてKOALA（交通まちづくりNPO）との研究会実施
堺市内ウイグル料理店にてKOALAとの懇談会
- 10月27日 加西市役所ヒアリング、三木市役所ヒアリング
北条鉄道利用者インタビュー
- 10月28日 京阪バスヒアリング
- 10月29日 帰札

総括

今回、現地訪問前に、札幌市にて事前調査を実施した。訪問先の堺市は、路面電車の新規導入計画を取り止めるか否かで揺れているところであり、2005年の札幌市電存続の経緯やその後の議論の状況を伝えることが大切であると判断されたためである。札幌市役所ヒアリングや利用者インタビューを行い、生活にとって路面電車が不可欠であるという市民の声存続を決定づけた、といった趣旨の報告を行った。KOALAからは北米の都市交通の状況やバスマップづくりについての報告を聞くことができた。

加西市・三木市は兵庫県西部の比較的小さな都市であるが、それぞれコミュニティバスの運行に積極的であり、交通担当の専門部署を設けるなどしている。いずれも福祉政策として行っている側面が強く、補助金を投入している。厳しい財政事情の中でデマンド型公共交通システムの導入なども視野に入れるべきであろう。

京阪バスでのヒアリングからは、高速バス部門については、高速道路の週末1000円への割引も影響し、利用者が減少傾向にあることがわかった。日本の多くのバス事業者は、高速バスの収益を市内のバスに振り向ける内部補助を行っているため、この状況が続けば、市民の足の存続が危うくなるケースも出てくると考えられる。



三木市役所にて



ヒアリング先への道

学生研修記



地域公共交通活性化への取り組み

山口 実佳子
経済学科3年
札幌開成高校出身

今回訪問した地域で特に印象に残っているのは、私が担当した兵庫県加西市でのヒアリングです。ここは大都市から遠く離れているため、公共交通の利用者が年々減少しており、活性化のための公共交通計画を掲げています。例えば、現地のローカル線、北条鉄道にイベント列車を運行し、利用者確保に取り組んだり、コミュニティバスの赤字改善のために、抜本的な再編と新しい交通システムの導入を試みたりしています。実際に現地で北条鉄道の利用者インタビューを行いました。運行本数が少なくなかなか乗る機会もないという声もありましたが、車に乗らない方や通勤・通学で毎日利用する方、高齢者の方にはなくてはならない足であると感じました。今回の研修を通して、環境問題や高齢化がクローズアップされるなかで、公共交通の役割の重要性について改めて確認することができました。



堺市役所にて市電グループ発表



利用者インタビューの打ち合わせ



京阪バスでのヒアリング



加西市役所にて



地域の個性を生かした公共交通

大寺 喬之
経済学科3年
札幌稲雲高校出身

今回、地域研修の事前学習や現地での調査、事後の学習を通じて、その地域の人々の暮らし、地域経済や社会のあり方が地域の交通と密接な関係があることがわかりました。特に、自分の調査担当の地域であった三木市の調査からそのことを強く感じました。三木市では、地元の学生を中心に地域住民にも親しまれ利用されていた三木鉄道を廃線にし、地域交通を見直す一方、交通空白地域を解消する地域の足として、老若男女が利用できる、その名も「みつきいバス」というコミュニティバスに関するアイデア・工夫も行っています。三木市のように、地域の個性を生かした公共交通を発展させることは、自分達の住む北海道にも適用可能であると感じました。

伊藤 淑子ゼミ I

ITO Yoshiko Seminar I
参加学生数 14人



伊藤 淑子
地域経済学科
教授



倶知安町内の公園にて

ニセコ山系観光に見られる国際化の動向

研修目的

ニセコ山系ではオーストラリアなどの海外資本が開発に関わり、従来の観光の質を大きく変化させている。その地域で何が起きているのか、なぜ起きているのか、これから何が必要かを、実際に地域内で活動している方達から聞き、考える機会をえることを、目的とした。

● 研修地 — 倶知安町

研修期間・研修先

- 8月25日 倶知安町役場 観光振興係長 西江栄二氏の講義
アンテナショップ見学、まちの駅ぶらっと見学
ニセコひらふ安全センター見学
ひらふ地区 Condominium 建設状況見学
- 8月26日 北海道トラックスデベロップメント訪問
(株)NAC社長 ロス・フィンドレー氏の講義

総括

今回の研修成果は以下の通りである。

1. 現在ニセコ周辺地区には、海外資本による Condominium 建設などがなされ、従来の日本型観光地とは異なる情景が展開されているが、札幌に住む学生の多くはその実態を知らない。まず現実にふれる必要があった。
2. こうした新たな展開の中で、倶知安町も従来の自治体観光行政とは異なる多彩で積極的な行政を展開している。その現状を聞く機会を持つことができた。
3. 実際に Condominium 経営、観光業経営を行っている方たちから、日本での起業に関心をもった経緯、経営の理念・方法等を聞く機会を持つことができた。

事前学習には多くの時間を費やしたが、学生たちにとっては初めての体験であり、「びっくりした」というレベルを大きく超えることはなかった。この「びっくり」を、さらに豊かな学びにつなげることが今後の課題であろう。



市民が作ったニセコひらふ安全センター



NACの前で

学生研修記



観光地「ニセコ」の成功

植田 麻那美
地域経済学科2年
札幌新川高校出身

今回、私達のゼミではニセコ地区を訪れ、観光地として確立した町を実際に見てきました。ニセコが観光地としてどのように発展していったのか、その経緯や行政の取り組み、そして今後の課題などを町役場の職員である西江氏からお話を伺いました。ゼミ内で事前にニセコ地区について調査をしていったのですが、そこからは分らなかったことや、より深いお話をさせていただき充実した研修になったと思います。今回の地域研修で何より貴重な体験となったのが、ニセコの観光地化に大きく貢献したロス・フィンドレー氏から直接お話を伺い出来たことです。実際にニセコの発展に携わったフィンドレー氏の話からは、失敗を恐れずに何事も挑戦するという、私達にはない発想や行動力を感じました。ニセコ地区のように観光地として成功するには柔軟な発想と行動力、行政との連帯が大切だと思います。



アンテナショップ内の農産物販売



倶知安町のゆるキャラ「じゃがたくん」



いたるところにある英語版の案内地図



ロス・フィンドレー氏と



豪州人による観光の活性化と今後の動向

山本 秀幸
地域経済学科2年
滝川西高校出身

今回はロス・フィンドレー氏と倶知安町役場の西江氏から直接お話を聞きました。ロス・フィンドレー氏は(株)NACを設立し、ニセコの観光客が減少する夏季をアウトドアで活性化させようとしています。そこで彼が注意した点は、小さい規模から取り組み失敗しても取り戻せる範囲で経営を始めたこと、サービスの低下で信用と信頼を失い、客数を減少させないようにすること、常にポジティブシンキングであること。西江氏は倶知安町の現状について詳しく説明してくれました。現在、倶知安町では海外からの観光客が急増したために、受け入れ体制や安全対策の組織体制を整備させています。研修に行つての反省点として質問の時間を頂いた際に発言がなかなかできませんでした。しかし今まで経験したことのない新鮮で良い研修となりました。今回の反省を生かし来年度も伊藤ゼミで楽しみつつ学んでいきたいです。

内田 和浩ゼミ I

UCHIDA Kazuhiro Seminar I
参加学生数 9人



内田 和浩
地域経済学科
教授



お世話になった高橋課長補佐、渡部さんと芽室町役場の前で

芽室町上美生地区の地域住民組織と地域づくり

研修目的

「芽室町上美生地区の地域住民組織と地域づくり」をテーマに、実際の自治体における地域づくりへの取り組みに触れることにより、地域づくりにおける「協同」「協働」の意味や「住民の意欲と主体性の確立」の実態に迫り、具体的な地域づくり実践を実感する機会とする。

● 研修地 — 芽室町

研修期間・研修先

- 9月9日 芽室町役場企画財政課（芽室町のまちづくりの概要 IIと合同、芽室町における住民組織と上美生地区の概要）
- 9月10日 上美生小学校・中学校（見学・PTA会長及び小学校校長より聞き取り）、高橋ニジマス食堂（前・上美生地区総合振興会長より聞き取り）、上美生農村環境改善センター（上美生地区協議会長等から聞き取り）、ふるさと交流センター「やまなみ」（見学）芽室町役場（宮西町長との意見交流会 IIと合同）居酒屋「野の花」（芽室町役場職員との交流会 IIと合同）
- 9月11日 芽室町役場企画財政課（総括的な質問・確認など）

総括

前期の内田ゼミ I（地域社会論ゼミ I）では、「地域社会の実像—自治と協同・協働の地域づくり」をテーマに、山本英治編著『地域再生をめざして』（学陽書房,2005）をテキストとして、苦難の中で住民自身の協同と協働の力で自治を生み出そうという地域づくりが、全国各地域で取り組まれていることを学んできた。

本研修ではそれらを踏まえて、住民による地域再生のための自治基本条例などによる「協働のまちづくり」に先駆的に取り組んでいる芽室町に注目し、その中で特に山村留学による地域づくりを行っている上美生地区を調査地として選んだのである。

上美生地区では、中学校の統廃合問題をキッカケに、学校存続と地域再生へ向けて移住者受け入れの促進と山村留学の取り組みを行っていた。そのため住民全員が会員となる上美生地区山村留学推進協議会や新旧住民の交流の機会が積極的につくられ、大きな成果となっていた。参加した学生たちにとっては、聞き慣れない地域組織の名称が多く、戸惑ったことが多いと思うが、農村社会における地域組織の実態に直接触れる良い機会になったと思う。



宮西町長との意見交流



上美生小学校で、青山校長と樫沢PTA会長より聞き取り調査

学生研修記



地域づくりへの取り組み

加藤 つばさ
地域経済学科2年
本別高校出身

私たち内田ゼミナール I では、山村留学などの取り組みを行っている芽室町上美生地区について調査し、町長やPTA会長さんなど様々な方々に、山村留学を行ったきっかけや、その後どういった効果を上美生地区にもたらしたのかなど様々な質問をしました。結果として、山村留学を行った事によって上美生地区の中学校は廃校を免れ、その名は全国へと広がり地域づくりの取り組みとして大きな成果を現しています。私は今回の調査で、芽室町役場の人々などを含め上美生地区の住民一人一人が一生懸命自らの地域と向き合っている事を強く感じました。そして、住民の意欲こそが地域再生のための最も大きな糧となるのだということ、芽室町上美生地区の地域研修を通じて実感することができました。



挨拶する萩森ゼミ長



上美生中学校を見学



上美生農村環境改善センターでの聞き取り調査



前・上美生地区総合振興会長への聞き取り調査



上美生地区における取り組み

小出 幸奈
地域経済学科2年
札幌篠路高校出身

私たち内田ゼミナール I では、9月9日から11日にかけての二泊三日で芽室町上美生地区を訪問しました。研修の目的は、ゼミで学んできた「協働のまちづくり」を実際に地域に行き調査することでした。芽室町ではまず役場の方に芽室町についての説明を受け、芽室町自治基本条例など芽室町独自の取り組みについて詳しくお聞きすることができました。他にも、上美生地区協議会の方や山村留学推進協議会の方など地域の方々へ直接お話を聞かせていただきました。上美生地区で沢山あった組織を一本化しようと試みたが上手くいかず今も取り組んでいること、また小中学校存続のため山村留学などの取り組みを行っていることなど、上美生地区全体での地域再生の取り組みを学びました。それだけではなく、芽室町の人たちの温かさにも触れ、この地域研修での三日間でとても貴重な体験ができたと思います。

内田 和浩ゼミⅡ

UCHIDA Kazuhiro Seminar II
参加学生数 7人



内田 和浩
地域経済学科
教授



お世話になった「芽室十勝コーン炒飯推進協議会」渡辺事務局長と

「十勝芽室コーン炒飯」とリーダーの主体形成

研修目的

住民自身の協同と協働の力で自治を生み出そうという地域づくり実践の中で、どのような「学び」によって具体的な地域づくりが創造され、その担い手が形成されているか。芽室町における「十勝芽室コーン炒飯」のリーダーたちの地域づくりの主体形成過程を明らかにする。

●研修地—芽室町

研修期間・研修先

- 9月9日 芽室町役場企画財政課（芽室町のまちづくりの概要 1と合同）
芽室町中央公民館（十勝芽室コーン炒飯推進協議会渡辺事務局長から聞き取り）
- 9月10日 芽室町中央公民館（「十勝芽室コーン炒飯」のリーダー3人から聞き取り調査及びテープ起こし作業）
芽室町役場（宮西町長との意見交流会 1と合同）
居酒屋「野の花」（芽室町役場職員との交流会 1と合同）
- 9月11日 芽室町内見学

総括

前期の内田ゼミⅡ（地域社会論ゼミⅡ）では、社会調査における質的調査法を学んだ。

それらを踏まえ本研修では、住民による地域再生のための自治基本条例などによる「協働のまちづくり」に先駆的に取り組んでいる芽室町に注目し、ゼミⅠとともに芽室町を訪ね、「十勝芽室コーン炒飯」による地域づくりを取り上げたのである。

そこでは、飲食店の方5人、役場職員4人、JA農協職員2人、商工会職員1人、一般農民11人計23人で結成されている「十勝芽室コーン炒飯推進協議会」が活動を担っており、まず同協会事務局長である役場職員から概要の説明を受けた。そして、質的調査法を用いたリーダーへの調査では、飲食店主1人、農民1人、協議会会長（飲食店調理師）の3人に聞き取りを行ない、その克明なテープ起こしを行うとともに、それを元にリーダーの地域づくりの主体形成過程の分析を行った。

そこから、3人に共通する主体形成過程として、1.「出会い」による地域づくりへの「気づき」、2.他の業種の人たちとの協働の地域づくりの取り組み、3.地域づくりの公共性への「気づき」と新たな発展を確認できた。



手島企画財政課長より、芽室町自治基本条例についてレクチャー



芽室町役場にてゼミⅠとじっくり

学生研修記



地域研修を通じて質的調査を経験して

佐藤 勝俊
地域経済学科3年
帯広大谷高校出身

私たち内田ゼミナールⅡでは十勝の芽室町を研修地域として訪問し、そこで行われていたコーン炒飯の食における町づくり活動に重点を置き、質的調査を実施して、地域活動におけるリーダーの主体形成過程を明らかにするということを目標に取り組みました。質的調査を実施するにあたり、質問する中で話題がそれたりすることもありましたが、一通り調査を終わらせることができ、その人のきっかけ・出会い・気づきなどが町づくりに参加することに繋がるとともに、人格形成にも関係しているという結果を出すことができました。質的調査は、聞き取り調査でとったテープを一言一句書き写すテープ起こしという過程があり大変でしたが、とても良い経験になりました。最後に、芽室町の調査に関わってくださった方々にはとても親切にいただき感謝の心でいっぱいです。有難うございました。



熱心に語ってくれた宮西町長



宮西町長のお話を真剣に聴く様子



宿舎での打ち合わせ？



居酒屋「野の花」での懇親会



十勝芽室町における質的調査研究

升田 直宏
地域経済学科3年
札幌稲雲高校出身

内田ゼミナールⅡでは前期に質的調査研究方法を学び、芽室町における「十勝芽室コーン炒飯」の取り組みとそのリーダーの主体形成過程についての地域研修に臨みました。コーン炒飯の活動の母体であるコーン炒飯推進協議会のメンバーは飲食店、役場職員、一般農民などのメンバーで形成されています。リーダーとしての主体形成過程を調査するうえで飲食店の方の話を聞きました。元々コーン炒飯にはあまり興味がなかったが立役者でもある役場職員の役場の仕事とは別にその活動を取り組む姿に感動し、参加したそうです。実際にやってみると売り上げも上がり、直接活動に関わりのない業者も相乗効果で利益があがったそうです。芽室町のまちおこしの今後の課題としては、「食」の分野だけでは交流人口を増やすには限界があり、他の分野でどれだけ人を呼び込むかだと思います。

奥田 仁ゼミ I・II

OKUDA Hiroshi Seminar II
参加学生数 19人



奥田 仁
地域経済学科
教授



宗谷岬にて

最北の町の地域づくり

研修目的

稚内は日本の北端に位置し、地理的・気候的に不利な条件にあると考えられているが、これらをむしろ逆手にとって、様々な地域づくりの活動が活発に取り組みされている。ここから、地理的条件を一律に捉えるのではなく、多面的な観点と創意性が重要であることを学ぼうとした。

●研修地 一稚内市

研修期間・研修先

- 9月14日 稚内市役所
- 9月15日 北海道電力(1班)、稚内商工会議所(2班)、稚内信金(3班)
稚内観光協会(4班)、中央水産(株)(5班)
新エネルギー施設(風力発電・太陽光発電)(全員)
宗谷岬フットパスコース(全員)
北方記念館
- 9月16日 稚内市役所(報告会)

総括

事前学習の過程で、稚内の地域づくりのキーワードとして、①第1次産業、②観光、③サハリン、④自然エネルギー開発があげられることがわかり、これらを総合した地域研究を目指した。

初日。北海道の広さを実感しつつ、午後2時過ぎに到着。まず市長さんから総括的なお話をうかがったのち、サハリン課、観光交流課、水産商工課、地域振興課の担当者の方からレクチャーをいただいた。

二日目の午前は、これらの課題別に企業や団体をグループごとに訪問調査を行った。学生だけで訪問するため、挨拶の仕方から質問事項の整理まで緊張しつつも、親切に対応していただいた。午後には新エネルギー施設(太陽光、ウインドファーム)を訪問し、体験型観光ポイントとして育てられつつある周氷河地形丘陵地帯のフットパスを歩いた。

これらを通じて、地域のさまざまな産業・人・課題が相互に結びついていること、地域の特徴をユニークな視点で生かすことができるということが理解されたのではないだろうか。なおいつもながら、市役所、信金、観光協会など多くの機関で北海学園大学の先輩が地域を支え、地域研修にも協力して下さったことが印象的であった。



市長の熱弁に引き込まれる



太陽光発電実証施設

学生研修記



地理的条件を活かした街づくり

田中 秀典
地域経済学科2年
土別高校出身

稚内と聞いて私が最初に思い浮かべたイメージは、そう簡単には足を運べないとても遠く離れた地というものでした。ですが稚内市はこの地理的立地条件を活かして観光・クリーンエネルギーの開発・サハリンとの交流など様々な事業に取り組んでいることがわかりました。その中でも景観の良い稚内丘陵に設置された風力発電は実用性のみならず、フットパスコースも設けており稚内の観光事業のなかにも取り入れたいとのことでした。最終日の3日目には稚内市役所にて職員の方も交えての研修発表を行い、普段の学校での講義では体験できない緊張感を持って研修を終えることができ、とても有意義な3日間だったと思います。



市役所での事前レクチャー



宗谷岬ウインドファーム



質素だが楽しい夕食



最終日の現地報告会



稚内の太陽光発電の現状

汐川 哲史
地域経済学科3年
大麻高校出身

私たち奥田ゼミは稚内の現状を調べに稚内に行きました。5つのグループに分かれ稚内信金、稚内観光、水産加工業、稚内商工会議所、北海道電力にそれぞれ訪問し、色々なことを学んできました。その中でも太陽光発電について述べます。太陽光発電は環境的にクリーンエネルギーであるが、エネルギー密度が低く、設置場所など利用が限られてしまっているという問題点もある。

東京ドーム3個分もの広大な敷地に太陽光パネルを設置し、一般家庭の約1,700世帯の電力を発電していた。

この太陽光パネルは傾いて設置されており、これは積雪に対する対策で段差や隙間もあった。この広大な土地のパネルの量にとっても驚いた。これからの太陽光発電は利用が急激に広がり国内外で導入が拡大していくことが予測されている。

河西 勝ゼミⅠ・Ⅱ

KASAI Masaru Seminar I・II



河西 勝
経済学科
教授

川村 雅則ゼミⅠ

KAWAMURA Masanori Seminar I



川村 雅則
経済学科
准教授

財政再建下の夕張市民の暮らしの現状と政策課題

研修目的

2008年に引き続き、夕張を訪問して調査活動を行った。新たに策定される再生計画（2010年度以降適用）に市民の「声」を反映させるため、財政再建下の夕張で暮らす市民の暮らしの実態をトータルに明らかにすることを目的とした。

● 研修地 — 夕張市

研修期間・研修先

- 6月 調査研究計画の検討開始
- 7月 現地協力者との打ち合わせ
- 8月 事前学習
- 8月17日~23日 現地（夕張）入りし、終日、市内で各戸を訪問し、聞き取り調査活動
- 8月下旬 訪問しきれなかった世帯を対象にアンケート調査を実施
- 9月 道庁・道政記者クラブで調査結果を発表
- 11月 調査報告書を発行

総 括

財政再建下の夕張市民の暮らしの実態を明らかにするため、「夕張再生市民アンケート実行委員会」なる組織を、現地有志と法政大学関係者とともに立ち上げ、8月17日から23日までの1週間、夕張市内の各戸を訪問し市民から聞き取り調査活動を行った。調査では461世帯から話しを聞くことができた。さらにその後、訪問しきれなかった世帯に対しては郵送方式によるアンケート調査を行い、709世帯から回答を得ることができた。

調査の内容は、回答者本人の属性や世帯構造にはじまり、医療や介護での困り事、交通や再建後の地域の状況、仕事に関する状況、生活・暮らしぶりの実態や困り事など多岐にわたる内容だった。

両調査の有効回答を合計すると、調査当時の夕張の全世帯数である6180世帯の2割弱に及んだ。そこから浮かび上がってきたのは、たしかに、ときにテレビ報道などがセンセーショナルに描くような危機的状況に夕張市民の全てがおちいつているわけではないものの、「果たして夕張は再生可能なのか」「借金を返し終えた後に夕張は残っているのか」などの市民に声に象徴されるような、将来に展望が見えない、あるいは、弱い層から順に夕張で暮らし続けていくことができなくなっている状況だった。具体的には、失職した・仕事が見つ



現地入りして即説明会



聞き取り調査中

学生研修記



人口流出のひどさ

赤澤 友輔
経済学科2年
旭川凌雲高校出身

今回、私たちのゼミは川村ゼミと合同で、財政再建団体入りした夕張市民の生活の実態を調べるために聞き取り調査を行いました。

その中で印象的だったのは、比較的金銭に余裕のある人や、身寄りのある人は他の街へ移動していて、主に一人暮らしの老人が夕張に残っていくということでした。このような人口流出がおこる原因としては、借金返済で全国一の住民負担が課せられ、公共サービスがますます低下していくことが考えられます。人口流出を食い止めることと借金を返していくことの二つを同時に行っていくことは、非常に難しいことだと感じました。

今回、このような聞き取り調査は初めての経験だったので、実際に住んでいる人の話を聞くことができて、刺激を受けました。今回の研修でお世話になった市民の方々、ありがとうございました。



難しい聞き取り調査



山積みアンケート用紙



今日はどう動くか



報告書作成討論会



始まりとしての地域研修

中山 優介
経済学科2年
倶知安高校出身

河西ゼミはこの夏、財政破綻後の夕張市民の生活の実態を調査するため夕張を訪れました。現行の財政再建計画がもたらす住民負担の増加による生活の貧窮を浮き彫りにし、国、道、国民に事実として認識してもらおうというのが、今回の調査の主な目的でした。実際の調査なのですが、質問内容が世帯の構成から年取に至るまで多岐にわたったことと、住民の方々のご協力のおかげもあって、夕張市民の生活の実態を把握するという目的は、ある程度の成果を取めたと思います。しかし夕張市民の生活が貧窮であるという現状認識の全国的な広がりに対して、「では今後の夕張をどうするか」という問いへの何らかのアプローチが、今回の研修で抜け落した課題として残っているのも事実です。そのような課題が残っている以上、地域研修は終わりを伴わない始まりだと、僕は思わずにはいられないのでした。



「夕張再生市民アンケート調査報告書」
2009年11月、夕張再生市民アンケート実行委員会発行



大学にて



1週間の調査を為し遂げて



地元関係者からの説明



調査の説明



熱心に説明を聞く

からない、ダブルワークをしているが生活が苦しい、医療や介護での問題（市外への通院が負担、救急医療体制が不備、老老介護、独居の認知症高齢者）、クルマがなくて通院や買い物が不便、知人の転居等で地域のつながりがうすれてきた、近くのお店が廃業になって買い物が大変、お年寄りだけで除雪が困難、役場の連絡所が廃止され困った時の相談先がない、などなど、聞き取りやアンケート紙面には切実な訴えが多数寄せられた。現行の再建計画は期間内の借金の返済だけを前提に機械的につくりあげた、かなりの無理をはらんだものであり、2010年度以降の再生計画には、夕張市民の暮らしの実態が反映されることを強く願う。

ところで補足になるが、一点目は、私たちの活動・調査の結果はマスコミ等を通じて報じられたほか、2009年11月に発行した「夕張再生市民アンケート調査報告書」はいろいろな場所で利用されているとのことである。これまで夕張でいろいろのお世話になったことへの貢献が一定程度果たせたかなと嬉しく思っている。二点目は、調査では、十分な知識もない学生が自宅に上がりこんで、何時間もお話を聞かせていただくケースも少なくなかった。学生はこの調査活動を通じて大きく成長したと思う。夕張のみなさんにはあらためて深く御礼申し上げる次第です。



聞き取り調査の様子



自宅に上がりこんで

学生研修記



これからの夕張は？

内藤 泰葉
経済学科2年
北海高校出身

私たちは夕張市内全世帯を対象に、生活の困りごとや財政再建団体入り後の地域の状況などを聞き取りました。中でも特に多かった困りごとは、「救急体制」「除雪体制」の不備です。今の夕張の救急体制は、救急車が来ても搬送先が見つからず、1時間2時間もその場に留まっているという実例があり、命のかかわることなので、そのような救急体制では不安を拭いきれない住民が多かったです。また、除雪体制では、市で行う除雪の積雪量が10cmから15cmになり、高齢者にとってはかなりの負担になっていました。

その他にも、夕張は高齢者が多いので高齢者の方にばかり注目してしまいがちですが、これからの夕張を支えていく現役世代にも、教育費の負担や子どもの生活環境について不安を抱いている人も多く、人口流出が進む夕張市にとって、住民の生活維持は重要な課題になるのではないのでしょうか。



夕張市での研修を振り返って

藤井 佑也
経済学科2年
美幌高校出身

今回の調査では一週間に渡って住宅を訪問して聞き取り調査を行った。夕張市の人口約5割程度が高齢者で占められているのには驚いた。実際に調査してみると交通のインフラが非常に悪く、バスが一時間に一本あるかないかの水準で、学生が通学で利用しない土日にはもっと本数が減る。診療所に行きづらい、買い物に行きづらいなどの不便さを語る住民が多かった。改善すべき問題は山積みなのだが、財政再建団体入りしたため中々柔軟に事業を行うことができない現状を感じた。人口も年々減少していて、若者は就職先がないので市外に出てしまう。18年で市は借金を返済すると言うが、その間市民の生活が良くならなければ、借金がなくなっても意味がないのではと思う。この調査によって自分自身が得たものは大きく、テレビや新聞だけでは伝わらない、住民の生の声を聞くことができ、貴重な経験になった。



道はだにて聞き取り調査



地図を片手に移動中



調査で話がはずむ



調査データの入力

川村 雅則ゼミⅡ

KAWAMURA Masanori Seminar II
参加学生数 10人



川村 雅則
経済学科
准教授



関西大学にて

北海道における非正規労働をめぐる問題と政策課題

研修目的

「派遣切り」に象徴されるような、わが国の深刻な非正規労働問題の実態をアンケート調査や聞き取り調査を通じて把握し、今日の雇用・労働政策をめぐる議論をふまえた上で、その改善策を検討すること。

● 研修地 一札幌市

研修期間・研修先

4~8月 文献研究
9~12月 調査活動(アンケート・聞き取り調査及びそのとりまとめなど)
12月 インターゼミナール大会@関西大学に参加

総括

ゼミナールⅡでは1年間を通じて様々な活動を実施している。例えば、5月にはタクシー調査を行い、8月には、2年生と一緒に、昨年同様、夕張での調査に参加したのものもある。そうしたゼミ活動の中で得られた問題関心にもとづき、研究テーマを学生達自らが選び、12月に開催されるインゼミ大会に参加させている。今年彼らが選んだテーマは、わが国の非正規労働をめぐる問題であった。

ゼミを3つにわけ、(1)公務分野、(2)学校教員、(3)郵政職場それぞれの分野の非正規問題を研究の対象とした。非正規問題全般だけではなく、それぞれが対象とした分野についての文献研究も必要になり(例えば、郵政民営化とは何だったのか)、結果として、夏期休暇中も含め、文献研究や調査活動にはげむこととなった。

調査活動では、(1)指導教員(川村)が集めた大規模アンケート調査の結果と、(2)彼らが独自のルートで非正規労働者を対象に行った聞き取り調査結果を使い、報告書をまとめた。調査活動を通じて、非正規雇用の拡大を雇用形態の多様化と評価する見方が一面的なものであって、実際には、有期雇用・雇止め、低賃金・社会保障制度の不利、キャリア形成の困難など様々な問題を抱えていることを彼らは知ることとなった。12月には関西大学で開催されたインゼミ大会で研究成果を報告した。今年もまた充実した1年であった。



タクシー調査の風景



大阪城をバックに



インゼミ分科会のように

学生研修記



非正規労働者の調査を通じて

黄金 知広
経済学科3年
紋別北高校出身

私たちのゼミでは非正規雇用を巡る問題の考察の一環として、非正規労働者の方たちへの聞き取りを行いました。

聞き取りの中で感じたことは非正規雇用が不安定な雇用であるということです。賃金は正規と比較して低く、また1年などの短期で契約を更新していくというのは、非正規雇用の不安定さを象徴するものであります。調査報告書の作成に当たって、そのような不安定な雇用である非正規雇用の増加は、活動家である湯浅誠さんが主張するような労働市場の沈下、下へ下へと働く力が強まっていると感じました。現代日本の職場では非正規以外にも正社員の過労など様々な問題があらわれています。地域研修は、非正規雇用の問題は決して他人事ではない、それを理解する為のいい機会となりました。



(写真4点とも)分科会のように



非正規教員が抱える問題について

野々川 華奈
地域経済学科3年
札幌北陵高校出身

私たちのゼミでは、非正規労働者への聞き取り調査を行った。現在日本では、非正規雇用が増加しており、有期労働契約をめぐる問題、均等・均衡待遇等の問題が改善課題となっている。

非正規で働く高校教員から聞き取りを行なったところ、学期終了毎の更新継続に対する不安や同時期に複数校で異なる科目を掛け持ちしているハードさに加え、授業以外での生徒の様子がよく分からず一方的な生徒指導になることへの不満や実態を知り、非正規雇用の不安定さに加えて、「人」を相手にして働く教員など専門職であるが故に抱く不安や精神的負担を感じた。各地で勤務した非正規教員のその経験は多くの生徒や学校、地域にとっても価値あるものであり、現在の採用制度、学校体制ではそれを評価する柔軟さに欠けていると強く感じた。

北倉 公彦ゼミⅠ・Ⅱ

KITAKURA Tadahiko Seminar I・II
参加学生数 40人



北倉 公彦
地域経済学科
教授



長沼温泉ふれあいセンターにて

グリーンツーリズム・part 6

研修目的

グリーンツーリズムの各種活動を展開している長沼町において、その一環として取り組んでいる“スローフード運動”を中心に話を聞き、体験し、その本質についての理解を深める。

●研修地—長沼町

研修期間・研修先

- 9月17日 どぶろく製造農家(松村農場)
道の駅、農産物直売所
スローフード運動について講義(仲野満氏)
リンゴ農家(仲野勇次農園)
パークゴルフ体験
長沼町長及び職員との夕食・懇談会
- 9月18日 ファームレストラン「ハーベスト」
ハイジ牧場で各種体験(乗馬、ミルクジャムづくり、乳搾り)

総括

今年も長沼町で“スローフード運動”を中心に地域研修を実施した。まず、“どぶろく”とはどのようなものかを知り、それが収入の一つの道となっていると同時に、この運動を支えていることが理解できたと思う。

ファームレストランを営んでいる仲野満氏からは、体験談と今後の抱負を聞き、また、レストランを見せてもらった。地域の食材を主体とした料理を提供し、年間を通じて札幌をはじめ各地からの来客でにぎわい、“スローフード運動”の中心的存在となっていること、交流人口の増加に大きく貢献していることを知った。

仲野リンゴ園では、北海道開拓とともに作り続けられてきた“まさかりカボチャ”を守る努力を聞いた。

ハイジ牧場では、ミルクジャムづくりや乳搾り体験などをした。しかし、広々とした牧場でのんびり時間を過ごすのは、退屈と感じたようである。

様々な話や体験の中から、“スローフード運動”とは、地域の食文化と食材を守り育てることであることを理解してくれたものと思う。

研修の実施に全面的にご協力いただいた長沼町の皆様に、心から感謝申し上げる。



仲野さんから“まさかりカボチャ”の話聞く



ミルクジャムづくり体験

学生研修記



仲野満さんと
“ハーベスト”

末野 章博
地域経済学科2年
戸別高校出身

地域研修で最も関心をもったのは、ファームレストラン“ハーベスト”と、その経営者の仲野さんの話であった。

趣味で建設したログハウスを活かし、地元食材による料理を出したいとの思いで始めたという。農業に新たな可能性を見出していったことに感心した。

客が喜んでくれる料理を提供するため、コストを削減するのではなく、原価率を30%から50%に引き上げたり、価格が少々高くても町内の業者から仕入れし、店で町外客が落とす売上げを地元還元させている。また、従業員はすべて長沼町民を雇い入れている。

役場の人たちとの懇談で、長沼には町をよくするかを考え、様々な活動をしている人が多いという話を聞いた。

長沼町には、人を引きつける大きな力があつた。



ファームレストラン「ハーベスト」



乳搾り体験



パークゴルフ体験



“スローフード運動”の
根本と地元の熱意

山岸 愛理
地域経済学科2年
札幌日大高校出身

仲野リンゴ農園や、生産したものをふるまうレストランなどを見ることができた。また、北海道で古くから作られている“まさかりカボチャ”を、純粋な品種として守ろうとする人にも出会うことができた。

これらを通じて、地元の食材や食文化を見直す“スローフード運動”の根本を学ぶことができた。

農業の跡継ぎになる人を呼んだり、グリーンツーリズムやスローフード運動に取り組む町民や役場の方々の話を聞き、その姿にふれて、その熱意にはとても感心した。

各地で過疎化が進む中で、長沼町が「人口の減らない町」といわれるのは、長沼を愛し、地元の食材や食文化を通してこの地を発展させようとする人が大勢いるからであろう。

小坂 直人ゼミ I・II

KOSAKA Naoto Seminar I・II
参加学生数 24人



小坂 直人
経済学科
教授



伊達市開拓記念館にて

近代製鉄のルーツを探る

研修目的

鉄を生産する技術は今日においても一国の生産と経済を大きく左右する可能性を有している。その近代製鉄技術に寄り添うようにわが国古来の伝統的製鉄技術が展開してきたことは驚きに値する。この新旧の製鉄技術を同時に間近に見る機会となるのが今回の地域研修である。

● 研修地 — 室蘭市・伊達市

研修期間・研修先

10月29日 新日鉄室蘭製鉄所
伊達市黎明観鍛刀所
伊達市開拓記念館



高炉下にて

総括

新日鉄室蘭製鉄所は、「鉄の町・室蘭」の要に位置し、戦前は言うまでもなく、現在にあって本道の金属加工業、機械工業を素材的に支えるとともに、全国の鉄鋼需要に幅広く応える生産拠点の一つとなっている。鉄の時代は既に過去のことであり、アルミなどの軽金属や石油化学に基礎を置くプラスチックが鉄に取って代わり、産業の基礎素材となる時代がやってくる、とまことしやかに言われたこともあったが、19世紀後半以来の「鋼鉄の時代」は依然として続いており、「産業の米」としての鉄（鋼鉄）の地位はいささかも揺るぎない。

このたびの研修で、日頃文献等ではしか触れることのできない生産現場（溶鉱炉と棒鋼工場）の姿を間近にみることは感激であった。また、伊達市黎明観で伝統製鉄技術に基づく日本刀鍛錬所を訪れ、その作業を火の粉のかかる近さで見学し、3名の学生が実際に槌打ち経験できたのは幸いであった。渡辺惟平刀匠の刀と鉄にける情熱と弟子の養成に心血を注ぐ姿が学生たちにはことのほか印象的であったようである。近代製鉄技術と伝統的製鉄技術を結ぶ北海道の鉄文化が室蘭市と伊達市を舞台に展開している事実の確認が重要であろう。



広い工場はバス移動



製鉄所遠景

学生研修記



新旧の製鉄技術に触れて

伊藤 優
経済学科2年
札幌新川高校出身

現代社会のあらゆる分野で機能している近代製鉄技術は、わたしたちの生活と密着しているものであり、テクノロジーの発展とともに鉄が担う世界はますます大きく広がっています。さまざまな分野の用途に合わせて技術を駆使して鉄の持つすばらしい機能や可能性を引き出し、生活の発展に貢献する新日鉄室蘭製鉄所は、北海道にとどまらず、全国の拠点となっていました。また同時に古来の伝統的製鉄技術にも触れることができ、それを伝え続ける渡邊さんの生の声を聞いて、伝えたいと思う信念や背景、自分を超越してほしいというお弟子さんへの言葉から伝統に対するこだわりを実感しました。この研修を通して学んだ近代製鉄のよさ・伝統的製鉄のよさ、この両方がそれぞれに生活シーンに繁栄される瞬間を見逃さず、経験したことを思い返すことができたらいいなと思います。



移動中のバス内



溶鉄流出風景



いざ、製鉄所へ！



ホテルでの昼食



技術継承、応用の難しさ

松平 広明
経済学科3年
札幌新川高校出身

今回の研修では新日鉄室蘭製鉄所と伊達市黎明観にて鍛刀場を見学しました。まず、製鉄所の沿革と展示室のパネルやモデルの説明をしていただき、実際の工場設備見学の際にはとてもイメージしやすかったです。最先端の制御機能を備えた製造設備によって精密に製造され、自動車部品やつり橋のメインケーブルに使用されていることを考えながら見学すると、最先端技術の重要性を理解することができました。鍛刀場の見学では特に間近で見ると鍛刀風景には迫力があり、その後の渡辺惟平刀匠の室町時代の日本刀の目標や弟子への技術継承の難しさを深く理解することができました。今回の研修にて、最先端技術は古くからの技術の積み重ねで、決して最先端技術だけでは成り立たないということが最大の収穫でした。

小田 清ゼミ I・II

KODA Kiyoshi Seminar I・II
参加学生数 27人



小田 清
地域経済学科
教授



十勝岳火山砂防情報センターにて

地域づくりを多様な取り組みから学ぶ

研修目的

2009年度の研修目的は、多様な地域づくりで成功している自治体あるいは施設を訪問し、町長や園長から事業開始のきっかけとそれを実施するにあたっての苦労や問題点を直接に聞くことにある。そして、今後のゼミの取り組みや将来の進路に生かすことにある。

● 研修地 — 美瑛町・旭川市

研修期間・研修先

- 9月24日 札幌出発、美瑛町美馬牛の拓真館（前田真三記念館）見学
美瑛町役場（浜田哲町長他から「日本で最も美しい村連合」について講話）
十勝岳火山砂防情報センター見学
- 9月25日 旭川市旭山動物園（坂東園長より「旭山動物園の目標」について講話）、動物園内を説明を受けながら視察
帰札

総括

「地域研修」もすでに6年目を迎え、ここ2～3年、研修先を選定するのに苦労しているところです。幸いにも08年10月、経済学部で開講された「コープさっぽろ寄付講座」の講師として美瑛町長と旭山動物園長が講演され、その内容が出版されました。それを事前学習のテキストとして使用することができ、また、旭山動物園の成功談がTVで放映され、ビデオ収録で学ぶこともできました。これによって、ゼミ生は地域や施設の内容をかなり詳しく知ることが可能となり、学習効果が高まると判断し地域選定を行ないました。

事前学習の効果もあって、ゼミ生は質問内容などを工夫・整理して的確な、それでいて想定外の質問も出され、時間を超過して応答がなされました。特に「美しい村連合」のリーダーとしての浜田町長の取り組みと旭山動物園長のボルネオでのオランウータンの保護活動などについては大いに感動を受けたようです。事前学習の効果が大きい研修でした。



美瑛町役場全景



美瑛名物・カレーうどん



自由に泳ぎ回るペンギン



寄付金付き自販機



美瑛町長の熱弁



旭山動物園・坂東園長の説明

学生研修記



環境との共生を学んだ貴重な体験

大久保 亮央
地域経済学科2年
長沼高校出身

2日間にわたって美瑛町と旭山動物園で地域研修を行いました。どちらも長引く経済不況の中、地域あるいは経営不振からの復活を目標とした地域です。動物園についてはすでに事前学習で内容は周知していましたが、坂東園長からの倒産の危機から年間入園者数 300 万人超へと、日本一になるまでの貴重な体験談・苦労話には感動しました。特に興味を引かれたのは「動物の自然の姿の素晴らしさを感じてほしい」という係員の純粋な感情から生まれた「行動展示」についてで、「命」への優しさを感じました。ボルネオへの動物保護募金活動についても説明を受け、地球の抱える環境問題の深刻さと、環境に国境はないという考えを基本に地球で育まれているすべての生命のために知恵を結集すべきこと、われわれは「何のために学ぶのか」ということを考えさせられた地域研修でした。

小さくても輝くまちづくりの実践を学んで

熊野 礼菜
地域経済学科3年
札幌手稲高校出身



「地域づくりを多様な取り組みから学ぶ」というテーマで訪れた美瑛町は、事前学習で景観を活かしたまちづくり

を行っているということを知りましたが、実際に目にする、やはり基幹産業である農業の生産基盤となっている畑作地帯が織りなす農業景観は感動的でした。美瑛町役場では、浜田町長等から、この自然環境や景観、農林業の営みを資産とし、それを有効に活用し自立を図るため、「日本で最も美しい村」連合に積極的に取り組んでいることの話を知りました。市町村合併が進められている中、合併以外にも町村が生き残る道はあるんだと勉強になりました。町長は、「地域が自立し、自らの町村に一人一人が誇りを持てる『小さくても輝くオンリーワン』を見つけることが大切だ」とおっしゃっていました。この考え方は、今の北海道にとってとても重要な考え方だと思いました。この研修はこれから地域経済を学んでいく上で、また将来の生き方に役立つ素晴らしい経験になると感じています。



せるぶの丘



熱心な聴講



ボルネオの現状紹介



旭山動物園・坂東園長の講話

佐藤 信ゼミ I・II

SATO Makoto Seminar I・II
参加学生数 21人



佐藤 信
地域経済学科
教授



ホテルの前にて

十勝の農業生産者と消費者組織の結びつきを調べる

研修目的

十勝支庁は北海道における大規模畑作地帯として、そして新しい事にチャレンジする意欲的な住民の多い地域として知られている。本研修の目的は、十勝における農業生産者、消費者組織、BDF（バイオディーゼル）製造工場を視察し、取組内容の特徴とそれぞれの結びつきを明らかにすることである

● 研修地 一帯広市・豊頃町・池田町・幕別町

研修期間・研修先

- 9月14日 出発
コープさっぽろトドック帯広センター
- 9月15日 エコERC視察・見学
池田町ワイン城視察
農業生産法人 有限会社ホーブランド視察
- 9月16日 移動



帯広トドックセンター内のBDF給油施設



コープさっぽろ帯広トドックセンターで説明を受ける

総括

今回の研修は、広い十勝管内の中で、主に帯広市内、豊頃町、幕別町を訪問した。最初の訪問先であるコープさっぽろトドック帯広センターは、宅配事業のためのセッティング、配送を行っている施設である。帯広の生協は、元々「コープ十勝」という名称であったが、2007年にコープさっぽろと統合して現在の姿となった。その結果、経費削減が進むとともに、商品検査を自前で実施するなどの効果が得られている。最近ではBDF（バイオディーゼル）車の導入に力を入れている。生協の場合、宅配の際の廃油回収ができるとともに、宅配車そのものにもBDF燃料が使用できる。2009年度中に全道120台のトラックを200台に、帯広だけでも30台に増やそうとする予定である。

生協にBDF燃料を提供している会社が㈱エコERCである。訪問した豊頃工場は、なたね油とBDFの製造を目的として2008年に建設された。ここでは家庭や外食等から出る廃食油を原材料としてBDFを製造するとともに、なたね油製造を行っているのが特徴である。なたねは、畑作の輪作体系に組み込むことができるとともに、将来は、地元産なたね油というブランド化も期待できる。

幕別町にある農業生産法人ホーブランドは、2008年にコープさっぽろ農業賞をうけた、畑作や野菜、養豚など複合経営の農家（妹尾代表）である。ホーブランドでは、特に「放牧養豚」の視察を行い、その説明を受けた。畜舎内で飼われている養豚はストレスをためやすい。家畜福祉の観点からみると今後ストレスフリーの放牧養豚が必要となると考え、試験的に放牧を始めているとのことであった。

ゼミナールI・IIでは、事前学習を進めて研修に臨んだが、実際の研修では不慣れな所も随所に見られた。しかし、現地で関係者から直接話を聞くなど良い体験となったと思う。

学生研修記



今後の取り組みに期待

日蔭 崇人
地域経済学科2年
北海学園札幌高校出身

今回の研修で訪問した、株式会社エコERC工場が印象的でした。この工場では、使わなくなった油（廃油）を住民等から回収し、バイオマスエネルギーであるバイオエタノールに変えてまた使用できるようにしています。今後役立つ、環境に優しいエコの一つだと思い、素晴らしいと思いました。

また、BDFを燃料として利用しているコープさっぽろの帯広トドックセンターも訪問してきました。トドックの配達用の車にBDFを使用し、二酸化炭素の排出量を全体として減らすよう努力しています。帯広における環境問題対策の一端が分かりました。全体的に、帯広市とその周辺が丸となり、協力をすすめることで地域の活性化に繋がっていくと思いました。今後の活動、対策に期待したいと思います。

廃天ぷら油から次世代の燃料へ

横山 諒平
地域経済学科3年
札幌清田高校出身



今回の研修で印象に残った訪問先は、BDFを生産している豊頃町のエコERC工場

です。廃天ぷら油を活用したこの燃料は、環境負荷が極めて低く、一般家庭も天ぷら油を集めて回収に出すだけで環境に貢献できるところが魅力だと思いました。現在はバス会社やコープのトドックに利用されています。しかし、訪問先でのヒアリングではBDFが抱える問題も学ぶことができました。北海道では冬にはBDFが凍ってしまうため、BDF100%では走れないことや、そもそも法の規制によって公道ではBDF100%では走ることができないことなどです。BDFが社会に普及するためには、現在の主要な燃料を供給している石油会社との関係性も大きな課題となってきます。今回の訪問ではBDFの持つメリットと共に課題も知ることができました。これらの課題をどのようにクリアしていくのか。一事業体だけでは厳しいかもしれませんが、世論が動けば変わるかもしれません。



宅配時に回収された廃油



エコERC内で昼食



放牧養豚



ホーブランドで聞き取り

徐 涛 ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ

JO Tou Seminar I・II・III
参加学生数 10人



徐 涛
地域経済学科
准教授



恵和ビジネスにて

中国進出の北海道企業と北海道の華人企業

研修目的

株式会社恵和ビジネスと株式会社北海道チャイナワークの訪問・調査を通じて、日本企業の中国進出における課題と対策を検討し、北海道の地域振興の場合、中国ファクターをどう活用するのかを考えてみた。

●研修地—札幌市

研修期間・研修先

8月10日 株式会社 恵和ビジネス
8月11日 株式会社 北海道チャイナワーク

総 括

資料調査、聞き取り調査ならびに見学を通じて、2社の事業展開、経営理念、および中国進出・日本起業の経緯と現状について詳細に調べた。

恵和ビジネスは、中国大連市に子会社を設立し、中国の安価な熟練労働者を活用し、また最精鋭の設備を導入することによって、順調に事業を展開してきた。また、ほかの日系企業と異なり、中国人を経営責任者に任せるところに特徴がある。札幌本社において、長期間にわたって育てた中国人幹部を大連子会社に経営者として出向させ、事業を任せたことは非常に印象的であった。

他方で、中国人創業の北海道チャイナワークは、積極的に北海道の良さを中国にアピールし、中国人裕福層拡大の波にのって、事業を拡大している。北海道の自然、物産などの魅力は、まだまだ中国人に伝わらない部分が多い。これらの資源の活用は、北海道振興の重要なポイントではなかるうか。

北海道の中国進出企業は増加したが、進出に失敗した企業も少なくない。中国ビジネス成敗の要因は何であろうか。また、北海道と中国の関わりがより一層深まったが、必ずしも地域振興に十分リンクしていないのも実情である。今回の地域研修はこれらの問題を考えた上で、貴重な視点を提示している。



中国事業を熱く紹介している

中国物産ショップ
中国堂



恵和ビジネス・中国事業の紹介



経営理念を熱く語る北海道チャイナワーク・張社長

学 生 研 修 記



もっと北海道を中国にアピールしたい！

井上 拓郎
地域経済学科2年
札幌北陵高校出身

私たちは、華人企業北海道チャイナワークを調査し、張相律社長自らお話を聞くことができました。

北海道チャイナワークは中国旅行の手配、語学教室、ビジネスコンサルタント、物産店と幅広く事業を展開しています。中国人個人観光ビザの解禁にともない、今年の中国人観光客が去年を上回ると予想されています。その結果、中国語ができる旅行ガイドの需要が高まり、人材不足の問題が顕著になりました。また、張社長は、「北海道企業の経営に中国要素をどう取り入れるかは、今後重要なカギとなる」と説明し、もっと北海道の自然、食事、レジャー施設などを中国にアピールすることに力を入れたいと、意欲を見せました。

これからの北海道の地域振興において、いかに中国ファクターを取り入れるかについて、2日間の研修は大変貴重な体験でした。



中国進出の元気企業

須藤 孝洋
地域経済学科3年
滝川高校出身



恵和ビジネスを紹介している小倉部長



興味津津に学んでいる学生たち



真剣に機械操作を見学している風景



張社長と一緒に中国人観光客の北海道誘致を考えている学生たち

今回訪問した恵和ビジネスでは中国を対等なビジネスパートナーとして位置づけ、北海道チャイナワークでは日中の架け橋になると志しています。日本と中国が協力し合ってこそ互いの成長・発展が可能になるという認識において、共通点がありました。恵和ビジネスは、中国の大連市に子会社にデータ入力とシステム開発を委託しています。中国進出においては、もちろんコストダウンという目的もありましたが、企業間の取引において適正・適切なパートナーとしての役割があると説明を受けました。また、「もっと日中間の取引が増えるように」と、今後の中国ビジネスに期待が高まっています。一方で目覚ましい成長によって、近年、中国各地の賃金が上昇しているという不安も広がっています。昨年に引き続き、中国ビジネスを展開している道内元気企業の声を聞くことができ、とても良い経験になりました。

高原一隆ゼミ I・II

TAKAHARA Kazutaka Seminar I・II
参加学生数 17人



高原 一隆
地域経済学科
教授



江別・セラミックアートセンターにて

地域におけるネットワークと地域経済活性化

研修目的

第一に、積極的な地域活性化の試みを行っている地域の実態をフィールドワークすること、第二に、ネットワークというキーワードで地域振興の方法を学び、第三に、それらを統計数字と照らし合わせることで、地域を総合的に把握することの重要性を学ぶ。

●研修地 一栗山町・江別市

研修期間・研修先

- 8月19日 栗山町（経営企画課）
江別製粉（株）
- 8月20日 栗山農業振興公社
農業法人「粒里」
栗山町商工会議所
王子特殊紙（株）
- 8月21日 江別市（経済部）
江別市内巡回



栗山町役場にて



栗山町中心商店街



江別製粉ヒアリング

総括

栗山町は、地域通貨を媒介として地域における人と人とのネットワークづくりを進めてきたことで全国的に知られるようになった地域であるが、フィールドワークを通して、農家のネットワークによる協同生産システムの試みが地域経済の活性化と密接に結びついていることを知ることができた。

江別市では特殊な小麦とその製品づくりを通して経済主体のネットワークが形成されつつあり、このネットワークの効果も上がりつつあることを知ることができた。また、そのことによって、札幌市の衛星都市としてのみ位置づけられてきた都市が農業関連産業（ハルユタカ小麦の原料生産－加工－流通－消費）の‘ブランド’地域としての側面をもつことを知り、地域の多様性について理論だけではなく現場的な認識を自分のものにする事ができた。さらに、地域経済の活性化にとってネットワークがキーワードである事、なかんづく企業間（経済主体）ネットワークのもつ重要性を現場から知ることができた。



江別・町村牧場にて

学生研修記



地域内ネットワークを使った地域づくり

村山 和香奈
地域経済学科2年
弟子屈高校出身

研修中さまざまなことを学びましたが、とくに江別市のセラミックアートセンターでのヒアリングでは、とても興味深いお話をうかがうことができました。初冬蒔き小麦「ハルユタカ」という地域ブランド確立までの流れや、そこに行きつくまでの努力や苦労など、とても貴重な現場の声を聞くことができました。江別市には、農商工だけでなく、そこに行政や地域の人々も参加していくという、「ハルユタカ」を中心としたネットワークが存在します。このネットワークによって、企業を通して消費者の声を生産に反映していくという一連の流れを地域内連携の実例として学ぶことができました。

身近な地域ですが、学べることはとても多かったと思います。今年得た知識や経験をもとに、来年はさらに発展させた内容の研修を行いたいと思います。



ハルユタカの製品



小林酒造



栗藁プラザ/空き店舗の活用



江別・王子特殊製紙(株)



町の活性化に皆が積極的な意識を

馬籠 友貴
地域経済学科3年
北海学園札幌高校出身

私達は、「多様な地域づくりのフィールドワークネットワークと地域通貨‘クリン’の実態」を調べるため、栗山町で研修することになりました。しかし事前調査の段階で、クリンは機能していないことがわかり、栗山町役場、栗山商工会議所、(有)粒里でのヒアリングに切り替えました。栗山町の商店は廃れ、商店数は減っていき、人口の流出も増えているとのことでした。そんな中で栗山町は「100人委員会」などの政策を打ち出したが、町民の意識が低いため機能していないとのことでした。役場の方は、町民は町の活性化に対して消極的であるとおっしゃっていました。そんな町民に対して、役場の方も町の活性化についてあきらめかけていたので、政策を提起する役場の方々も町民も一人一人が自分の町を何とかしようとする意識をもち、栗山町ならではのまちづくりをしてほしいと思います。

西村 宣彦ゼミ I・II

NISHIMURA Nobuhiko Seminar I・II
参加学生数 28人



西村 宣彦
地域経済学科
准教授



函館市元町地区（港をバックに）にて

都市と漁村の結合～新・函館市のまちづくりと課題

研修目的

函館市は現在、「国際水産・海洋都市」を掲げて産・学・官一体のまちづくりを進めている。私たちは①函館市のまちづくりの歴史と今を学ぶと共に、②2004年に函館市と合併した昆布の里・旧南茅部町地域においてアンケート調査を行い、合併以降の地域とくらしの課題を探った。

●研修地—函館市

研修期間・研修先

- 8月24日 函館市役所にて「まちづくりの歴史」「国際水産海洋都市構想」のレクチャー、バスで市街地形成の視察
徒歩で歴史地区視察（市建設部職員によるガイド）
水産加工会社「布目」視察、「函館市臨海研究所」及び「がごめ昆布アンテナショップ」視察、夜の「大門横丁」視察
- 8月25日 函館市南茅部支所にて「南茅部地区の概況、地域性」のレクチャー、南茅部各地区を回り、アンケート調査を実施、BBQ
- 8月26日 南茅部地区を回り、アンケート調査を実施（不在分）
縄文史跡「大船遺跡」視察、南茅部温泉入浴

総括

函館のまちづくりを総合的に学習するため、事前学習で函館の都市発展の歴史や経済・産業構造を調べるとともに、函館市を含む平成大合併の状況を調べた。研修では到着後、函館市役所の山本建設部長より「都市計画的視点からの函館市の概況」と「函館市国際水産海洋都市構想」を中心に、地図資料を駆使した講義を受けた。続いて市職員の案内で、函館の中心市街地の変遷と西部地区の歴史的建造物保存を実地見学した。また函館の産業と産業政策を知ると、イカ塩辛等を製造する（株）布目の工場、函館市臨海研究所を見学した。

翌日は峠を越えて旧南茅部町地区に移動後、南茅部支所の梅田支所長より地区の概況説明と漁師訪問の際の心構えを助言して頂いた。その後東西40kmに及ぶ海岸線に点在する集落を回り、事前に送付したアンケート調査票を回収した。事後学習では調査票のデータ分析を行い、合併後、住民は行政に声が届きにくくなったと感じており、行政とのコミュニケーションの強化や、支所機能の強化を望んでいること、医療面で不安があることなどがわかった。学生には漁村地域の産業・生活に触れる素晴らしい機会となった。昆布漁の多忙期に訪問し、ご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げるとともに、貴重な時間を割いて回答して下さいました皆様から感謝申し上げます。



函館市役所にて、まちづくりの過去と現在を学ぶ



地元の方に話を伺う

学生研修記



合併に関するそれぞれの
思いを聞いて

岡元 綾子
地域経済学科2年
札幌月寒高校出身

市役所でお話を聞いて印象を受けたことは、旧函館市民は合併した旧四町村について、函館市という意識があまりないということでした。聞き取り調査では、南茅部地域の住民の方から合併に関する生の声を聞くことができました。合併したからといっても南茅部には何もいいことはないと感じているので、合併には反対だったという意見や、旧函館市との合併に携わった方のお話を聞くこともでき、合併に関する双方の意見を実際に聞くことができました。合併した後で行政サービスの水準が落ちたという意見はありませんでしたが、合併後の現状に不満を抱いている住民の方が多かったのではないかと思います。実際に南茅部町で聞き取り調査をしてみて、市役所の方では聞けないことでも学生という特権でさまざまな質問ができ、本当に貴重な体験ができた研修でした。



市建設部職員のガイドで街並み保存の取り組みを学ぶ



水産加工会社「布目」工場見学



地図を片手にアンケート調査票回収



南茅部支所(旧町役場)にてレクチャー



「合併から見える地域の
未来」

平澤 弘道
地域経済学科3年
北海高校出身

「平成の大合併」と呼ばれた市町村合併政策で、北海道の市町村は212から179に減少しました。その道内第一号が今回研修に行った新・函館市でした。研修のメインは、旧南茅部町で直接住民の方と会話をするアンケート調査で、住民の想い・考えなどを直接感じることができました。ただ説明を聞くだけの研修より得るものは多く、身近に感じることができた調査となりました。コンブ漁の最盛期でありましたが、漁師の方々など、お忙しい中協力していただきありがとうございました。初日には、函館市臨海研究所を見学しましたが、ここは産・学・官が協力・連携する、観光的要素をもった新しい形の研究施設です。今後の地域経済発展の一部を感じ取ることができました。

この研修では、新・函館市と、北海道全体が益々発展するためにはどうすべきか。そう考えるきっかけをもらった良い研修となりました。

平野 研 ゼミ I

HIRANO Ken Seminar I
参加学生数 7人



平野 研
地域経済学科
准教授



「みんたる」にて

フェアトレード (FT) 活動の現状と課題

研修目的

札幌でのフェアトレード (FT) 活動について調査することを通じて、発展途上国の生産者の現状を知り、国際貿易の問題点について考えていく。地域社会や日常生活での取り組みから、世界経済の問題解決への一歩を踏み出すきっかけを感じていく。

● 研修地 一札幌市

研修期間・研修先

- 9月11日 「みんたる」「これからや」聞き取り調査
FTカレーの調理
- 9月12日 エルプラ祭りでのFT広報活動参加
「アースカバー」「アンの店」聞き取り調査



総括

FTに関する文献を通読し、基礎知識を身につける事前学習をした上で、札幌市内にあるFTショップで聞き取り調査を行った。市民団体やFTショップの取組みを身近に感じながら学習することに重点をおいていった。

6月に開催されたフェアトレード・フェスタにボランティアとして参加し、関連するイベントや講演会にも出席した。講演会においてテキストとして使用した本の著者に直接話を聞く機会を得たことは有意義であった。8月には学習したFTの知識をまとめ、ブロックゼミナール大会のプレゼン部門に参加し、高い評価を受けた。

このような事前学習の積み重ねの上で、9月に地域研修を行った。店主のFTに対する思いや課題などを直接聞き取ったことは学習の成果を深めるものであった。日常の商品の中にある途上国の生産者の生活を考えると同時に、FT活動に関わっている人たちの思いに触れることができた。FTショップを訪問することで出来たつながりは、十月祭でのFTカフェ出店にも結びつき、楽しみながらFTに関わっていくきっかけとなった。

ゼミ以外の時間で活動が多かったが、各々が積極的に参加し、学習とその実践を体験できたといえる。



学生研修記



生産者の顔が見える取引 ＝フェアトレード

三田村 真希
地域経済学科2年
クラーク記念国際高校出身

今回の地域研修を通し、買物で世界・自分たちの生活を見つめなおすフェアトレード (以下、FT) への理解を深めることができました。どのFT取扱店でも、生産者と消費者を結び付けるために商品に対する知識を深め、自分が納得のいく商品を取り扱うことを心がけていると話していました。また、取扱店ではFT認知度の低さを課題とし様々な工夫を行っています。それに対し、「安さが全て」の考えで生産者を後回しにする現代社会の疑問も感じました。有機野菜販売店では、食の安全への取り組みを知るとともに、有機栽培導入の難しさについても知ることができました。FTは買物で世界・国内零細生産者の生活を考え、自分たちの生活も見直す取り組みです。最初から全てをFTにするのではなく、小さなことから取り入れ、問題意識を持ち日常を見つめなおすことの必要性を実感する研修となりました。



生産者と消費者を繋ぐ架け橋

日高 拓郎
経済学科4年
札幌新川高校出身

現在の日本におけるFTの認知度は、FT先進国であるヨーロッパに比べ圧倒的に低いのが現実です。ヨーロッパでは一般的なスーパーや生協でFT商品が当たり前に取り扱われていますが、日本ではまだ一般企業による取り扱いが例外的であり、FT商品を購入するためには専門店に足を運ばなければいけません。こうした背景をもとに、私達が研修で訪れたお店では「FTを伝え、消費者と生産者を繋げる」ことに重点を置いているように感じました。ただ商品を売るのではなく生産者の情報や商品の知識を消費者と共有し、また、店独自のイベントを開催していることが分かりました。地域研修での経験を活かし、十月祭では研修で訪れたお店に協力して頂き、有機野菜を使った豚汁やFT雑貨の販売を行い、微力ではありましたが【生産者と消費者を繋ぐ架け橋】の一端を担えたと思います。

平野 研 ゼミⅡ

HIRANO Ken Seminar II
参加学生数 8人



平野 研
地域経済学科
准教授



インゼミにて

北海道における外国人研修制度の成果と課題

研修目的

人権侵害など多くの問題を含む制度として国際的にも批判される外国人研修生・実習生制度について学習し、その制度の北海道における運用状況を調査する。外国人研修制度・実習生制度を通じて現在の世界的な低賃金構造や経済変動について考察していく。

●研修地 一札幌市

研修期間・研修先

10月13日 労働基準監督署・JITCO（国際研修協力機構）への聞き取り調査
10月26日 法務省入国管理局への聞き取り調査
12月20日 インゼミ大会にて研究成果の報告、討論



労働基準監督局にて



労働基準監督署聞き取り調査



インゼミ

総括

道外の外国人研修生制度での人権侵害などの事例や、制度の基礎知識について文献を通じて蓄積していった。事前学習を踏まえた上で、北海道での研修生制度の状況を把握し、北海道での外国人労働力を考えていく取り組みを開始した。具体的調査は行政機関と外国人研修生への聞き取り調査の二つによって進めて行くこととなった。

調査の過程で、北海道の研修制度は道外と事情が異なり、一次産業の割合が大きく、受入れ機関と研修生の関係が密接でトラブルが少ないことが判明した。同時に道内一次産業の労働力不足という問題が浮き彫りになってきた。研修生を「労働力」とすることは「研修」の目的から外れ、低賃金構造の原因でもある。このことをどう考え、北海道経済の発展に結びつけていけるのか、という議論は有意義であった。

残念ながら、外国人研修への聞き取り調査は、研修生トラブルへの過剰報道の影響などから実施できなかった。しかし、行政調査などの成果をまとめ、インゼミ大会に参加し、ワーキングプアなど幅広い討論の中で多角的な視野で再考察することができた。1年を通じて調査から報告という体系的な取り組みができたといえる。

学生研修記



新時代の外国人労働者とその共生

井畑 秀剛
地域経済学科3年
北海高校出身

「外国人研修制度とは何か？」という疑問からゼミは始まりました。この制度は、外国人が日本で技術等を修得し母国で活かすための制度ですが、時給300円で働かせるなど、想像もつかない日本の姿がありました。

地域研修で訪れた行政機関では、いずれも研修生制度の問題把握は十分に行われていないと感じました。特に関連機関の連携は薄いという印象を受けました。北海道は全国的にも模範例ともいえるほど、違法行為が少ないといえます。しかし、少子高齢化や一次産業の離職などで労働力が不足し続けると、研修生制度が悪用され、不正の増加などが予想されます。今後、外国人研修制度と北海道の受入れの実態を把握し、外国人労働者との共生の道を模索する必要を強く感じました。



JITCO聞き取り調査



入国管理局にて



インゼミ



インゼミ



北海道内の外国人研修制度の現状を知る

汲田 知子
地域経済学科3年
遺愛女子高校出身

私たちは、北海道の外国人研修生・実習生の実態を調べるため、労働基準監督署、JITCO、法務省入国管理局を訪問しました。労働基準監督署では、道内の二次受入機関の受入企業数と、道内でトラブルが起きた場合の対応について伺いました。JITCOの窓口では研修生の母国語を話すことの出来る人は本部にしかないため、相談は電話や手紙で行っているそうです。直接話したい場合は研修生が東京まで行かなければならないので、中国人研修生の受入れ数が多い北海道での対応に不十分さを感じました。入国管理局では、不正行為について色々な質問に答えて頂き、相談窓口の少なさや、トラブルの事前防止対策を重視していくべきだと感じました。

古林英一ゼミ I

FURUBAYASHI Eiichi Seminar I
参加学生数 10人



古林 英一
地域経済学科
教授



乗船実習後に

サケの増殖・漁獲・流通・加工を体験的に理解する

研修目的

わが国の水産業のなかで大きな位置をしめるサケは増殖・漁獲・加工・流通の諸過程をつうじ産業的な広がりをもっている。代表的な産地である標津町において、サケ産業の実態を理解することが目的である。

●研修地—標津町

研修期間・研修先

9月16日 標津町サーモン科学館（サケ漁業に関する講義）
9月17日 セリ場見学、神内商店（水産加工実習）
標津町サーモン科学館（サケの生態に関する講義）
サケ定置漁業実習

総括

標津町は有数のサケ産地であるが、ここでは安全・安心なサケ製品を全国に供給するために、地域HACCPを実践している。これは、生産から加工・流通・輸送に至るまでを含めた品質管理システムである。

地域研修では地域HACCPのレクチャーをはじめ、増殖事業の出発点であるサケの採卵作業、水産加工場での体験、さらに漁船に乗船して漁獲の現場を体験した。この研修を通じ、安全・安心な水産物を供給するために、多くの人々の努力があることを実感することが出来たと思われる。



加工実習



漁港での水揚げ作業



セリ場の風景



水産加工場



採卵作業



網起こし作業

学生研修記

私たち古林ゼミ I は、北海道の最東部の標津町へ行ってきました。標津町は、オホーツク海に面した漁業と農業



古林隊長とゆく！
標津町！！

新村 由香
地域経済学科2年
釧路北陽高校出身

が盛んな町です。標津町の漁港はとても綺麗でした。これは、消費者に安全で安心できる食品供給を目指し、標津町地域 HACCP システムを取り入れているからです。この HACCP システムは、食品の管理だけではなく、船や船員の体調チェックなど漁港全体の管理も含まれています。また標津町は、日本でも有数の秋鮭の生産地であり、町にはサーモン科学館という鮭専門の科学館があります。この科学館で私たちは、鮭の人工授精をさせていただきました。この体験では、鮭を木の棒で撲殺し、腹を切り、中のたまごを取り出します。日常では生きている魚を殺すことは、めったに経験することではないのでとても衝撃的でしたが、同時に命の尊さを実感しました。

研修最終日には、実際に漁船に乗せてもらって鮭の水揚げを体験させてもらう漁業実習があります。普段なら絶対乗ることのできない漁船に乗り、鮭が水揚げされて漁港に運ばれ、セリに出されるまでの流れを自分の目で見て体験することができました。たぶん、これからの人生で鮭を殺したり、漁船に乗ったりすることはないと思うので、貴重な経験ができました。



サケ漁業を体験して

小野田 梓
地域経済学科2年
苫小牧東高校出身

標津では鮭を中心とした町作りを行っています。私達はバスに8時間揺られ実際に標津まで足を運び、鮭の漁獲から加工場を見学し、実際に現地の人達のお話を聞くことができました。お話を聞くだけでなく、体験漁船で漁船に乗り、網を引かせてもらったり、鮭の解剖・人口受精体験など、身をもって貴重な体験することができました。また、地域ハサップという標津町の生産システムについても深く学ぶことができました。実際に現場に行き、体験したことで水産業などに関する興味・感心を抱くことができ、いろいろなことに対する見方が変わりました。地域全体が一つとなって町作りを行う姿勢がとても印象的でした。この三日間の貴重な体験により私自身も一回り成長することができました。



サーモン科学館大水槽



いよいよ漁船に乗船

古林 英一ゼミⅡ

FURUBAYASHI Eiichi Seminar II
参加学生数 12人



古林 英一
地域経済学科
教授



日高育成牧場で記念撮影にて

競走馬の生産・流通・利用の理解

研修目的

競走馬生産は北海道特有の地域産業である。競走馬の生産・流通・育成の各過程を見学し、関係者から講義を受け、さらに乗馬や牧場作業を体験することで、当該産業を理解することを目的とした。

● 研修地 — 新ひだか町・浦河町・様似町

研修期間・研修先

- 9月7日 ライディングヒルズ静内（乗馬実習）
JBBA北海道市場（市場施設見学と競走馬生産に関する講義）
- 9月8日 JRA日高育成牧場（調教施設見学と競走馬の育成に関する講義）
高村牧場（牧場作業実習）
門別競馬場（競走馬利用の見学）

総括

競走馬（サラブレッド）の生産・育成・流通という過程があって、はじめて華やかな競馬の世界が実現する。

様似町の高村牧場では競走馬の生産、浦河町にある日本中央競馬会（JRA）日高育成牧場では育成、静内町の日本軽種馬協会（JBBA）北海道では流通、そして最後に門別競馬場で利用の場である競馬をそれぞれ見学・体験させていただいた。また、静内町のライディングヒルズ静内においては乗馬の実習もおこなった。

研修に参加した学生たちは、一連の実習・レクチャー・見学をとおり、北海道の地域産業である競走馬産業を身をもって理解できたと思われる。



日高育成牧場での講義



厩舎内の清掃



グラス馬場（日高育成牧場）



乗馬実習の1000m屋内走路（日高育成牧場）



放牧場に向かう



トレッキングに出発

学生研修記



馬産地・日高を訪れて

川戸 広太
地域経済学科3年
旭川大学高校出身

古林ゼミⅡでは、軽種馬の生産、流通の実態を学ぶために日高支庁管内の馬関連施設に行ってきました。1日目は、ライディングヒルズ静内で乗馬を体験し、馬と触れあい、JBBA北海道市場にて、馬の競りを行う場所を見学し、競りの仕組みについて説明を受けました。2日目は、JRA日高育成牧場で、競走馬になるための訓練施設の見学と、高村牧場で、馬の放牧と馬小屋の掃除を手伝い、主に生産現場の様子を学びました。また、当初の予定にはなかったのですが、競馬場にも足を運び、競走馬の活躍している姿も見てきました。

この2日間、馬の生産から育成、流通、そして使われ方まで一通り見ることができ、とても充実した内容でした。



馬は家族

鈴木 絢也
地域経済学科3年
札幌西高校出身

私たち古林ゼミナールⅡの地域研修は1泊2日の日程で、馬産地で有名である日高支庁を訪れました。研修では、夫婦で牧場を経営し馬を生産している高村牧場や高度な科学技術を備えている日本中央競馬会日高育成牧場、セリが行われる北海道市場や乗馬体験のできるライディングヒルズ静内を訪れました。最も印象に残っているのは日高育成牧場であり、その広さ、施設、とにかく何もかもがスケールの大きなものでした。

また高村牧場のご夫婦の馬への愛情も非常に印象深いものでした。とにかく馬に携わっている人たちは心から馬が好きであると感じました。私自身、競馬というものには以前から興味があったのですが、研修を通じて1頭の馬が競馬場を走るまでに色々な人と触れ合い、背中を押されていると思うと、馬を見る目が以前とは変わってくる気がします。



乗馬実習の準備完了



乗馬実習開始



子馬もいる



厩舎内のボロ拾い

水野邦彦ゼミ I・II

MIZUNO Kunihiko Seminar I・II
参加学生数 18人



水野 邦彦
地域経済学科
教授



8月末でもやや寒い朱鞠内にて

朝鮮人強制労働現場の見学

研修目的

1930年代～40年代に朱鞠内附近で実施された雨竜ダム工事と名兩線（深名線）鉄道工事では、いわゆるタコ部屋労働がおこなわれ、そこには数多くの朝鮮人がふくまれていた。この労働実態を学ぶべく、事前にゼミで専門家の講義を受け、夏休みに現場を訪れる。

● 研修地 一幌加内町朱鞠内

研修期間・研修先

- 8月30日 笹の墓標展示館（旧光顕寺）
遺骨発掘現場
- 8月31日 朱鞠内湖
鷹泊墓地



生命の尊さにめざめ民族の和解と友好を願う像



朱鞠内湖畔の「塔」



朱鞠内湖畔での小野寺先生の説明



鷹泊の木標

総括

研修にさいしては全体的に空知民衆史講座の協力を仰ぎ、拓殖大学北海道短大の橋本信先生と一乗寺の殿平真副住職に本学のゼミ教室にお越しいただき、事前学習をおこなった。ここで得た予備知識をふまえて訪れた朱鞠内では、まず拠点となる笹の墓標展示館で、空知民衆史講座の小野寺正巳先生の講義を受けた。この展示館は、かつて事故死・不審死の遺体が運びこまれた旧光顕寺である。積年の歴史研究にもとづいた小野寺先生の講義は、学生たちに当時の様子を想像させるに十分であった。そののち、藪のなかにある朝鮮人犠牲者の遺骨発掘現場と墓地、そして建設されたダムを見学に行った。また、朱鞠内から深川への帰路にある鷹泊という集落は、かつて砂白金採取の現場であったが、ここでは、強制労働の末に死亡した朝鮮人を埋めたという日本人の告白を受け（吉村昭『逃亡』を参照）、住職や地元住民によって5体の遺骨が発掘されている。当時の埋火葬認許証などによると、5体のうち3体は朝鮮人、1体は日本人、1体は不明である。ゼミ一行はこの発掘現場で地元有志のお話を聞き、木の墓標に冥福を祈った。研修は全体として学生に一定の衝撃をもたらすものであった。

学生研修記



朱鞠内の遺骨発掘

込山 昇一
地域経済学科2年
北海道栄高校出身

朱鞠内の遺骨発掘現場には、朝鮮式の墓があった。これは東アジア共同ワークショップに結集した日本人・韓国人・在日韓国朝鮮人の若者たちの手によってつくられたものである。このワークショップでは遺骨発掘作業の結果、3体を掘り出した。2体は強制労働犠牲者とみられるが、残る1体は、手が不自然に腰のほうを向いていたため、後ろ手に縛られて殺された可能性があるという。さらに100人近くが現地周辺に埋まっていると思われる。国は時効を理由に遺骨未発掘を放置しているようだが、やはり国が作業をおこなうべきだ。ワークショップ参加者は、発掘現場に近い旧光顕寺境内に建てたビニールハウスで自炊し、昼は発掘、夜は討論と交流をくりひろげ、7日間の共同作業を遂行したという。私は幼少時から北海道に住んでいるが、朱鞠内で起こった事実をいままで知らず、恥ずかしさも感じた。



展示館での小野寺先生の講義



ワークショップの活動（展示写真）



犠牲者の遺品（展示物）



朱鞠内湖



人権をうばわれた朝鮮人被害者

伊藤 亜惟
地域経済学科3年
札幌篠路高校出身

朝鮮では集めるべき労働者の人数を役所が町や村に割り当て、ときには畑で働いている農民や通行中の労働者をトラックに乗せて連れて行ったという。危険でひどい労働現場で労働者たちは監視つきで働かされ、逃亡をこころみたり反抗したりする者には、労務係や警察による虐待・拷問が加えられたため、粗末な食事とあいまって死傷者が数多く出た。死傷者数はいぜん明らかでないが、これを把握するひとつの手がかりは、幌加内の埋火葬認許証、光顕寺過去帖、風連村の埋火葬認許証などにもとづく犠牲者名簿で、それにより204名が判明した。ダム建設の犠牲者が142名、鉄道工事の犠牲者が59名だそうだが、小野寺先生のお話では、コンクリートのなかに生きてまま埋めこまれた人もいると工事体験者が証言しているという。史実を知り人権や平和を思うことの重要性を思い知らされた。

水野谷 武志ゼミ I・II

MIZUNOYA Takeshi Seminar I・II
参加学生数 15人



水野谷 武志
地域経済学科
准教授



えこりん村にて

事業系食品廃棄物の現状と課題

研修目的

食品リサイクル法の2007年改正にみられるように、食品関連企業に対して食品廃棄物の発生抑制やリサイクルの促進が社会的に強く求められている。本研修の目的は、北海道内で先進的な取り組みをしている企業や自治体の施設を訪問し、その現状と課題を探ることである。

総括

本研修では、食品廃棄物を排出する側として、ハンバーグレストラン「びっくりドンキー」をはじめ様々な種類の外食店を持つ株式会社アレフ、定山溪温泉地域の主要ホテルを、事業所から排出される有機廃棄物を受け入れ・処理・リサイクルする側として、株式会社ばんけいリサイクルセンター、森町の水産系廃棄物リサイクル施設を訪れた。排出側では地域とも連携して廃棄物の抑制とリサイクルに取り組んでおり、また受け入れ側では有機廃棄物を低コストで環境にやさしい技術で良質な堆肥にしていることがわかったが、一方で、このような取り組みが実現している背景には環境に対する強い意識と大きな努力と費用の投入が存在していることもわかり、食品廃棄物の抑制とリサイクルを一層発展させていくことの難しさも認識した。この点で、学生研修記でも指摘されているように、この問題の解決は廃棄物を排出あるいは処理する側だけに任せておくのではなく、食品関連企業（典型的には外食産業）を利用する私たち自身もこの問題にどのように関わるのかが問われているのだと感じた。

● 研修地 一札幌市・石狩市・恵庭市・森町・函館市

研修期間・研修先

- 8月17日 株式会社アレフの施設（えこりん村、アレフ北海道工場など）
札幌市リサイクル団地、札幌生ごみリサイクルセンター
- 8月18日 株式会社ばんけいリサイクルセンター（石狩生ごみリサイクル工場「環生舎」）、定山溪観光協会、定山溪温泉地域の主要ホテル
- 8月19日 森町漁業組合、カネヨ木村水産株式会社の施設（加工場や冷凍庫）、森町水産系副産物再資源化施設、ホタテ未利用資源リサイクル施設
- 8月20日 森町水産課
- 8月21日 函館市ベイエリア



ばんけいリサイクルセンターでのヒアリング



森町水産系副産物再資源化施設の見学

学生研修記



定山溪バイオマスタウン構想の推進

井澤 里奈
経済学科2年
大麻高校出身

今回の研修で印象に残ったのは、定山溪のホテルで、実際に食品廃棄物の分別を中心に厨房などを手伝わせていただき、その後お話を聞かせていただいたことです。私たちは5グループに分かれて5社を調査させていただきました。定山溪地域では、「定山溪バイオマスタウン構想」の実現に向けて取り組んでいるのですが、実際手伝わせていただくと、分別がされているホテルとおそろそであるホテルがあったり、従業員に活動が広まっていないホテルがあったりと、まだ活動はホテルによってバラバラであるように感じました。また、お話を聞くと、ホテルの食品廃棄物は食べ残しが多いこともわかり、消費者である私たちにできることの大きさも学びました。これからは、定山溪地域の全ホテルが活動の推進に意欲的になり、それと共に消費者が食べ残しを減らす努力をすることが構想の実現をより早くすると思います。



堆肥化見学①（アレフ恵庭農場）



見学②（環生舎）



見学③（森町）



講演+意見交換会（森町水産課）



ホテルの夕食準備・片付けを手伝ってわかったこと

鈴木 慎之介
地域経済学科3年
岩見沢西高校出身

水野谷ゼミはゼミのテーマである食品廃棄物についての実態を調査するために3泊5日の地域研修に行きました。

今回多くの研修先で訪問した中で、印象に残ったのが、8月18日に定山溪の「生ゴミ堆肥化活動」に参加している有名ホテル5社で私達が実際に夕食の配膳や片付けを手伝わせてもらえないながら、実態をアンケート聞き取り形式で調査したことです。各ホテルによって活動内容、意識などに大きな違いがありアンケートも非常に興味深い結果となりました。

また、宿泊先ではキャンプやゼミ生の誕生会を行うなど、寝食を共にして交流も非常に深めて、他ではできないとても充実し素晴らしい経験をしました。

山田 誠治ゼミ I

YAMADA Seiji Seminar I
参加学生数 16人



山田 誠治
地域経済学科
教授



帯広駅前にて

帯広の地域メディアの実態とその戦略

研修目的

十勝地域の地域密着番組の作成の現状やコミュニティFMなどの地域メディアの可能性について、その中心的担い手である十勝毎日新聞社を訪問し、新聞・テレビ・ラジオそれぞれの取り組みとそのメディアミックス戦略の現場を訪ねた。

●研修地 一帯広市

研修期間・研修先

10月20日 札幌出発、バスで帯広到着。

帯広駅前にて地域メディアに関するアンケート調査。

10月21日 帯広シティケーブルテレビについて。現状、番組・記事制作の過程などの説明。

FM JAGAについて、DJ栗谷さんから、局のポリシー中心の説明。十勝毎日新聞について、メディアの在り方、記事制作の過程などの説明をきく。

バスにて帰路。

総括

一日目の帯広駅前調査では、それぞれのメディア別年齢男女別にその浸透度や受け止めは異なり、それと二日目の各メディアの説明との対比で、学生はいろいろ考えさせられたようで、その意味で意義があった。

特に、地域メディアの存立やその意義、またそのための各メディアが抱えている課題について、調査と説明との間で様々な考えが及んだ。発信する側の現場の人から直接話を聞くことで、その認識が改まっていくことと、ただ受け手の反応だけでなく、作り手の思いにまで理解が及ぶと、メディアについての見方が変わることも研修の意義があったと考えられる。

また、十勝毎日新聞グループということもあったが、それぞれのメディアが多方面への戦略を考えており、地元密着についての考え方が多様であったのは、これから地域メディアを考える上で意味があった。

地域の相対的に小さいメディアが、いろんなところに工夫を凝らし、十勝の地域のそれぞれの階層からそれなりの支持も受けていることも確かめることができ、しかし、さらにそのニーズを協力しながら実現していくことで経営上の問題を克服していくところに学生たちは可能性を感じたようである。



アンケートを行った帯広駅前



帯広シティケーブルテレビの編集室にて



帯広シティケーブルテレビの取り組みについての説明

学生研修記



地域メディアそれぞれの展開について考えさせられた

吉田 一茂
地域経済学科2年
札幌光星高校出身

帯広における地域メディアの影響という点で、十勝毎日新聞の購読者数の多さからいって、新聞の影響は大きいことを実感した。新聞離れが起きている現在、インターネットニュースの手軽さなどのように、手軽に情報を入手できるという形態を取り入れることは、ラジオ、テレビでも同じだと思う。また、この地域では、全国に先駆けインターネットによる情報配信を行っている。ケーブルテレビでは広域の地域にすばやく質のいいものを配信し、ラジオにおいては十勝管内だけでなく、その中の番組を、インターネットによって配信していて、全国どこでも聞くことができる。

地方メディアは地域住民あつてのメディアであり、住民の意見を聞き、何を求め、何を要求しているのかに、いかにして応えていくことが生き残る最善の方法であると考えた。



FM JAGAスタジオ



FM JAGAのDJ栗谷さん



熱心な十勝毎日新聞社の説明



活気ある十勝毎日新聞社の編集室



地元の多様なニーズに応える大切さを実感

小西 央花
地域経済学科2年
札幌旭丘高校出身

帯広ケーブルテレビは、少ない人材の中バラエティ番組や地元スポーツ、市議会や花火大会の中継など住民のニーズに応える多種多様な番組を制作していた。また、FM JAGAは、地元住民のニーズに応じて発信し、特にコミュニティであっても小さな考え方ではなくても自信や誇りを持ちやうっていくことが大切だ、ということに説得力を感じ、10代20代から圧倒的な支持を受けているのも、その根差し方にあると思った。

地域メディアの重要性について、またその影響力の強さについて改めて感じさせられた。地域にとって地域密着メディアはなくてはならない存在であり、だからこそ発展と成長を遂げてきたのだと思う。これからも、帯広だけでなく様々な地域において、地元住民のニーズに応じていく地域密着メディアは成長し続けていこう。

山田 誠治ゼミⅡ

YAMADA Seiji Seminar II
参加学生数 12人



山田 誠治
地域経済学科
教授



関西空港にて

関西の地域メディアの実態とその戦略

研修目的

関西地域は、特徴的なメディアが発達し、発信力についても個性的な展開をし続けていることから、その地域密着番組の作成の現状やコミュニティFMの現状と可能性について実際の現場を訪ね、地域メディアのあり方について学習することを研修の目的とした。

●研修地—京都市・吹田市・神戸市

研修期間・研修先

- 11月24日 札幌出発、関西空港経由で京都到着。
京都市中心街にて地域メディアに関するアンケート調査。
- 11月25日 KBS京都テレビにて、地域密着番組作成の取り組みについての説明を受ける。京都FM三条ラジオカフェを訪問。局の設立過程・取り組みについての説明を受け、実際の放送現場を見学。
- 11月26日 吹田市のFM千里を訪問。開設の目的、取り組みについての説明を受け、番組に出演。神戸市のFMわいわいを訪問、研修を受講。
- 11月27日 関西空港から札幌へ。

総括

地域メディアの特徴は、地域情報の何をどう伝えるのか、地域の様々な発信者とその役割を引き受け、自らメディアを開発し、伝えたいテーマの発信に挑戦するところにその熱意と困難性がある。

今回は関西地域を訪問し、独立系放送局として特徴的な経営をしているKBS京都、初のNPOのコミュニティFM局として実に多彩な番組を発信しているFM京都三条ラジオカフェ、郊外で地域に根差した文化を発信しようと設立されたFM千里、そして神戸市長田区で震災を契機に設立された多文化・多言語のFMワイワイを訪問した。

一日目の局所的な街頭アンケート調査では、聴取者・視聴者への地域密着メディアの浸透度はまだまだ弱く、作り手と受け手のギャップについて考えさせられた。

しかし、学生たちは、大手メディアの影響下でのメディア経験や感性を持っていたのに対し、個性的な地域メディアの現場の担い手の情熱・気迫に強烈な印象を持ったようだ。コミュニティFM局を設立する苦労話を聞き、担い手の根底にある地域に対する想いや郷土愛、また使命感のようなものに魅せられ、学生にとって仕事のやりがいとは何かについても考えるきっかけとなった研修であった。



KBS京都で説明を受ける



京都での昼食風景

学生研修記



地域色を強く押し出す
コミュニティFM

越智 慶如
地域経済学科4年
旭川南高校出身

僕が今回の研修で一番感じたことは、コミュニティFMは、各々の特色を大きく押し出していかなければ魅力を引き出せない、そして、携わってくれる一般の人々と職員との「ラジオが好き」という気持ちで成り立っていることでした。京都らしい良い特色を持ったKBS京都、ラジオに対する情熱がすごく伝わり、また、その運営の楽しさがすごく伝わってきた三条ラジオカフェやFM千里は、小さい局ながらも、サイマルラジオなどで様々な人々に聴いてもらおうと工夫し、ガンバ大阪や演歌歌手とのつながりを生かし、地域への浸透に力を入れていました。また、FMわいわいは、局全体として国際的な特色を活かしていこうと努力していました。どの局も経営が苦しい中人々に支えられ、独自のカラーを出しながら目標や理想を追い求めています。



キャスターと放送スタジオで番組に出演？



地元紙で紹介されたお坊さんのパーソナリティ



京都三条カフェのスタジオ



FM千里の生放送に出演



地域メディアをつくる人たちの熱い想いを実感

成島 未夏
地域経済学科3年
北海学園札幌高校出身

私が各局を訪ねて印象に残ったことは、そこで働いている方々の「熱い想い」でした。京都FM三条ラジオカフェは、日本初のNPO法人のラジオ放送局で、その設立の経緯を局長の町田さんから聞くことができました。市民の大きな支えのもと、少人数だから出来る番組作りやカフェでの地域住民の交流の場ともなっており、町田さんのラジオへの想いの強さを実感しました。設立3年目のFM千里は、地元の小中学生がリポートする番組があるなど製作面の広さがあり、生放送の番組に出演もできました。震災をきっかけに、外国籍の人向けに開局したFMわいわいは、多言語の放送を行い、今までとはまた違った放送局だと思いました。共通して言えるのは、どの局もそれぞれに「こだわり」を持っていることや、たくさんのボランティアスタッフに支えられ、地域との関わりをととても大切にしていることを強く感じました。

地域研修報告書 2009



北海学園大学 経済学部

[経済学科・地域経済学科]

●お問い合わせは●

経済学部

TEL: (011) 841-1161 (内線2222)

<http://www.hokkai-s-u.ac.jp>

<http://www.econ.hgu.jp>

制作: (株)ラボット

イラスト&立体©S.KAI